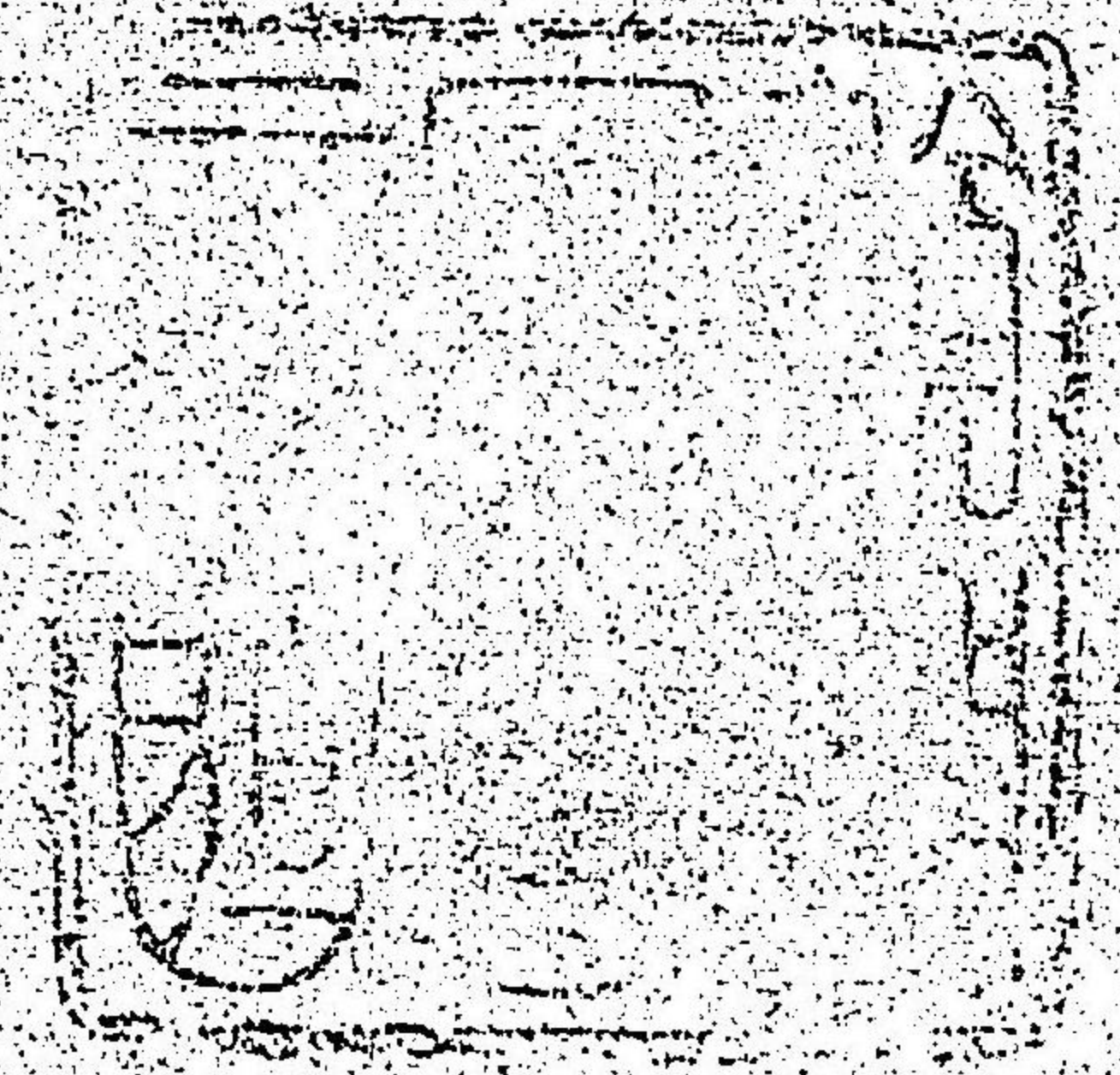


基督教の教訓及び其生活 全

米國神學博士
加奈多神學士
目本エフ、ジ、ハー、リ、ン、グ、ト、ン
田留六郎合譯



明治三十三年十一月
バプテスタ教會發行



序

此小冊子の體裁に關して聊か數言を要することあり、即ち耶穌基督及び其使徒等の教訓の概略を説明するに當りて神學上の術語を用ゐずして大抵普通の言語を用ゐること是なり。余は聖書其物より假借し來れる言語を除きては凡の術語を避けて、今世の雅言を以て、彼の一度大教師の口唇より出で、更に其神感を蒙りたる使徒等によりて發達したる眞理を記述するの企圖を有せること久し、何となれば斯る雅言は老幼に係らず凡の人々の最も好く了解する所にして其心意と感情とに最も深き感動を起すべきものなればなり。

親愛なる讀者諸君は余が此小冊子を著作するに當りて自ら勞働を惜むことなかりしと附言するを許さるゝならん、何となれば本書は神の祝福によりて其意志に關する知識に幾何を加へ或者をして耶穌基督を以て其救主又其王として之を歓迎するに至らしむる希望に出づればなり。蓋し基督のみ道なり眞理かり生命なり。

千八百九十五年七月十九日

ニユートン、セントルに於て

アルバ、ホベイ識

目録

第一編 耶穌基督の教訓

叙	一
第一章	神に關する基督の教訓一三
第二章	人に關する基督の教訓二六
第三章	基督の身自らに關する其教訓四一
第四章	聖氣に關する基督の教訓五九
第五章	基督自己の事業に關する其教訓六五
第六章	基督の王國に關する其教訓八四
第七章	基督の王國の律法に關する其教訓九八
第八章	基督の王國の秩序協同に關する其教訓一〇八
第九章	基督の王國の發達に關する其教訓一一四

第二編 使徒等に依て基督教々訓の發達せる事

- 叙.....一六一
- 第十章 三位一體の神に關する使徒等の教訓.....一二四
- 第十一章 人に關する使徒等の教訓.....一三〇
- 第十二章 基督の事業に關する使徒等の教訓.....一三五
- 第十三章 基督の王國に關する使徒等の教訓.....一四四
- 第十四章 王國の協同に關する使徒等の教訓.....一五五
- 第十五章 基督の王國の進歩成績に關する使徒等の教訓.....一六九

第三編 信條クレドの制定と其用法

- 第十六章 信條に關する疑問.....一八五

第十七章 古代教會の信條.....一九四

第十八章 東部教會の信條.....二〇二

第十九章 羅馬教會の信條.....二〇七

第二十章 新教諸派の信條.....二一二

第二十一章 諸教派の特異なる教説.....二二一

第二十二章 バプテスト派の位置.....二三五

第四編 基督教々訓と生活との關係

第二十三章 教訓は生活を規定す.....二四七

第五編 基督教々訓の生活に對する應用

叙.....二六一

第二十四章 神に對する愛.....二六四

第廿五章 人に對する愛……………二七三

第廿六章 交際上人に對する愛……………二八八

第廿七章 實業上人に對する愛……………二九八

第廿八章 國民的生活上人に對する愛……………三二八

第六編 基督教々授の改良

第廿九章 基督教々授の實質に於ける改良……………三三七

第三十章 討論中にある若干の疑問……………三四七

第卅一章 基督教々授の方法に於ける改良……………三六四

附 録……………三七一

基督教の教訓及び其生活

第一編 耶穌基督の教訓

權威ある者の如く教へたまへり(太七〇二九)

叙

基督の教訓は其根本なり

基督教の教訓を知らんと欲せば宜しく何れの處より之を始むべきかと尋ぬる者あらば吾人は之に答へて曰ん吾宗教の開基者たる耶教基督の教訓を以て之を始むべしと然り而して此れ吾人は斷じて彼の教訓を以て其使徒等の教訓より信用すべきものなりとするの故にあらず、只畢竟彼等の宗教的教訓の信用すべきは彼の教訓の上に基するを以てなり、蓋し此關係は使徒等が甘じて承認したるものにして且爾曹に聽く者は我に聽くなり(路十〇十六)との主の聖語中にも明に之を教へられたればなり、此關係に於ける諸の事實を精細に考究することに

よりて我主の教訓の意味と實體とに關する使徒等の證明を以て正確にして十分なる者と承認するに至る也、又其證明によりて第一に耶穌が使徒等に教へたまひしことを周く四方に宣傳せんことを彼等に委任したまひしことを知り(太十〇二七全二八〇十九、二十約二十〇廿一―二三)第二に其聖語を想起し且生命の道を示す所の諸眞理を知る爲に特別の神佑を彼等に約したまひしとを知る(約十四〇二六全十五〇二六全十六〇十二―十五)されど使徒等の智識は十分に於て其教訓は眞實なるも以て主の聖語の如く其言語を以て本原基礎的に於て生命ある者たらしむるに足らざるなり(太一一〇二七全一三〇三七)抑主基督は永久人類の大教師(太二四〇三五)にして神と其仁恵とに關する眞理の源頭として存在したまふものなるが(約四〇二四)故に吾人は先づ教訓を彼に仰ぐなり。

四福音書に發見せらる

然して吾人は何れの處に彼の教訓を發見するかとならば第一之を四

福音書中に索めざるべからず、何物も此記録に代ふること能はざるなり、蓋し主の傳道事業に關する四福音書の記録は質樸直寫にして活如たるが故に十分信用を措くべきものなり、吾輩は其中に懷疑、隱匿、利己、虚飾、諂諛、辨解の形跡ありや否やを發見せんと欲して之を研究せしかども全く徒勞に属したりき、而して四福音書が主耶穌に歸する思想は其時代其國民の思想の上に超越せり、換言すれば四書の記する所は主耶穌が之を道破したまひしと假定するに非ざれば之を了解する能はざるなり、此故に既に福音の眞理を否む心を持って其本源を説明せんとせる近世の批評家の事業は巧妙なれども遂に徒勞に属したりき、蓋し近世の批評家中一人として其事業を完成し若くは基督の生涯と教訓とに關する四福音證據に於ける賢明なる學者の信任を攪動したる者あらずとは反駁の虞なく之を揚言するを得る所なればなり。

又四福音書は大略ユダヤ人の空想によりて發したる説話にしてガリ

福音書は荒唐の観に非ず

ラヤの一野人の生涯に附會せる奇談より構成されたるものなり、即ち人々を欺騙する目的なきものか、れども只單に其國民が既に耶穌を以てメシヤなりしとし従て彼等は推察上メシヤに歸せし所の事柄を彼は必ず説話し及び實行せざる可らずと信せし故に大抵假托せられたる説話ありといひて以て之を説明すること能はざるなり、何となれば假令此人民は奇蹟を行ふの力あるメシヤを待望みたるものとすもナザレの耶穌の如き目的と氣質とを有せるものを待望みしにあらざればなり、且其奇蹟を見ることなくして彼は眞實のメシヤなりと信仰するは、其道德上の威嚴と其宗教上の教訓との爲に彼等が深く感動せられしとせば福音書に述ぶるが如き奇蹟を推察によりて彼に歸したりとは信すべからざるとなりとす、耶穌の傳道事業上最も著るしき事柄は耶穌の神聖なる生涯と其教訓との故を以て彼を信じたる信實なる人々によりて其事業に係る元來の記録に如斯く附加せられたり

第一世紀に記さる

と斷言するは無稽の極にして、如此く斷言する者には性情ある神の實在及び奇蹟の可能なることは信する能はざるものなりとの事實によりてのみ説明さるゝを得るあり。

又福音書は第二世紀中に記されたる者にして各は教理上の目的の故に作爲され、各福音書中の説話は或は附加し或は削減し或は他の變更によりて其記者の目的に適合せしめられ、書中の言語と行爲とは其記者の隨意を以て論定せられ想像上の事柄は恰も實際ありしが如く憚る所なく之を加入されたり、即ち之を要するに斯く單純にして正直なる吾四福音書を以て眞理を助くるためなりといへども實に虚構に出でたりといふ假設あり、是亦前説の如く維持すべからざるものなり、嗟夫作爲虚構の根本よりして吾人の四福音なる菓實を生せんや、或は樹を善しとし其果をも善しとせよ、或は樹を惡しとし其果をも惡しとせよ、蓋樹は其果によりて知らるればなり、太十二〇三三現今斯る假設を

辨護する者極めて稀あるは敢て怪しむに足らざるなり。

パウロの如き者と同時代の人々が、特に主の傳道事業の大部分間に耶穌と共に居るか或は十二使徒中の者に親しく交りたりとせば其人々は福音を記すことを得たりしと信ずるは理に於て難からざる所あり、何となれば此時に當りて彼等は嘗て世に現れし最大の教師の警咳に接したるを以て若し彼のうちに道義上の齋整又は美德あらんには其言行は容易に彼等に通徹して玲瓏として彼等の記録に反射すべければなり。

然るに第二世紀の或る無名の信者が始めて四福音中の一を記しと信ずるか或は遙に基督の後、人ありて基督の傳記の草稿上に大なる附加をなし依て福音書の一を生せしと信ずることすらも全然たる妄信なりと思惟するあり、嗚呼イザヤの末部の記者は大無名者なりといふなかれ、夫れイザヤの詩歌の構成は假令ひ榮然として榮譽あるも之を

基督の傳道事業の實際の事柄を知ることなくして福音書を記述する勞力に比すれば只兒戯たるのみ、若し實際の事柄を知らずして之を記述するものとせば斯る記録は數多の点に於て流暢と統一とを缺くべきことは萬に一をも避くべからざることなりとす、

加之吾人は四箇の福音書を説明せんことを要するを一考すべし、若し吾人が是等の記述を第二世紀に引下せば同世紀中彼の人にして同時に神なる者の生涯を相異なる言語と相異なる行爲とを以て描寫するを得し四人の至高の才能ある無名信者ありしことを信せざるべからず、吾人は右の如き狂妄なる理論を是認するものに與する能はざるあり、ジョン・スチュワート・ミル氏の言は眞實にして嚴肅なるものなり、其言に曰く

偏理的批評によりて他物は悉く取り去らるるとも基督は猶遺さるべし、蓋し基督は凡て其末流の弟子は勿論彼自らの薰陶を受けたる人

々とも等しからざるが如く亦其先輩にも異なれる空前絶後の人物なり、福音書中に示されたる如き基督は歴史上實際的人物にあらざるも、其品格上稱讃すべきことは大抵其弟子等の傳説によりて附加されたるやも知るべからずといふは無用なり、其弟子等若くは彼の改宗者中に誰れか今日耶穌に歸せし教訓の言語を發明し若くは福音書に現れたる彼の生涯と品性とを想像し得たるものあらんや(宗教上の論文二百五十三頁)

ゲエテ亦同様の言をなせり曰く

吾は四福音書は慥に眞物なりと考ふるなり何となれば是れ基督の人物より發出せし威嚴の反財によりて洞貫されればなり、而して若し嘗て此地上に神靈が現出したりとせば基督は是れ神靈なり

(Gesprache mit Eckermann III. P. 371)

吾輩は第四の福音書の著者に就き争はれたる彼の大議論を忘却する

第四の福音書は眞

物なり

ものに非ずと雖も此には單に使徒ヨハネが其著者なりと主張する古代より普通の意見に反對せる諸の大論駁が充分に答辨せられたりと信仰を記述せん、而して彼が此福音書の著者なりしとせば假令基督の昇天後六十年に於ける老齡にありとするも彼の證明の概要眞實なるを疑ふは無益也、吾人が其記述に信任するは大磐石の上に立つが如し、彼が其記録中の人々の肖像に於ける識別及び場處と時間とに於ける井然たる配置は主がニコデモに告げたまひしことサマリヤの女に語りたまひしこと敵對するユダヤ人又は弟子等に語りたまひしこと等につき其記述に對する吾人の信用を喚起するなり、而して此福音書が基督に對して深く尊敬を致せる結極的の證明は少しも教主の教訓を故さらに記者が變更せしことありとの推測を挟む能はざらしむるなり、然らば彼の一層先に於ける福音書と等しく喜んでヨハネの福音書に基督の教訓を求むべからざるの理何所にかある

然るに基督の教訓を知らんが爲に如何にして諸福音書を學ぶべきか又儘に此目的に達せしむる方法は指示せられ得べきか、吾人は答へて曰ん得べからずと、何となれば是れ學生の勉強の方法よりも寧ろ其氣質即ち公平と通觀とに關すればなり、然れども其勉強の方法に關して一言すべし、(一)別々に各福音書を學ぶときは幾分か基督の教訓を知るに便益あり、蓋し此方法に由れば各福音書の目的と精氣とは一層明に心意上に印せらるべければなり、又屢學生を導きて基督の聖言の意義を知らしむるに大なる幫助を與ふべし、(二)初の三福音書を合併して勉強すれば亦基督の教訓を知るに便益あり、蓋し心意は時として一人の證據よりも三人の證據によりて一層深く感動せらるべく又時としては一の記述よりは三重の記述によりて一層明瞭なる真理の状態を知るを得べければなり、同一の真理にして三書の言語が相同じからざるときは特に然りとす、又假令言語は正に同一なるも各記述に於ける

其前後の關係相異なる所は其意義を開發するに助を與ふべし、猶又マタイ、マルコ、ルカの三福音に於る基督の教訓を以て第四の福音書に於るものに比較すれば一層の便益を得べし、何となればヨハネの記述中には他の三福音書中にあること、概ね相一致して且其外の大部は一層精細を加へ證據明確にして基督の神人兩性に就き一層深淵なる確信を學生に與ふること明あればなり、此故に勉強の一方は始に各福音書に於ける基督の教訓を別々に且十分に研究し、次に初の三福音書に於ける教訓につき概括的研究をなし、終りに初の三福音書の教訓を以て第四の福音書中の者に比較するにあり、如此くすれば其進行は遅かるべけれと其結果は堅實なるべし。

抑四福音書は基督の教訓を發出せしむる第一首要ある根源なるを以て随分長時を要して之を論述せり、然るに新約に於いて他の書簡中に存する一二の文章ありて福音書中に記述されたる耶穌の聖語と同列

に置かるべきものあり、ルカによれば使二十〇三五其一はパウロによりて發せられたるものにしてミレトスに於てエヘソンの長老どもに語りたる同情的にして有力なる彼の勸話中に存するもの即ち與ふるは受くるよりも猶幸ありとある是れあり、古代の基督信者の記録を精細に勉強せば第二世紀或は恐くば第三世紀の人々に口づから主より傳へられし聖言あるの證據を得ることは爲し能ふべきことなるべしといへども其教訓の神聖なる性質は吾人の信仰を確實にする價值ありとするも福音書中に保存されたる基督の教訓の全体に加ふる所僅少あるべく否、絶無あるべし

基督の教訓に付ての智識の依て以て得らるべき首要ある根原に就て吾輩の研究の結果を論述するに當りて之を短縮せんが爲め概要を擧ぐる方法に従ひて一人の福音著者によりて記されしか或は皆によりて記されしかに關せず主の聖語を一處に蒐集するとは必用あるべし、

基督の教訓を再造する計

且又明瞭と短縮とを得んが爲に其教訓の論法上の順序完全を得んとよりは寧ろ基督によりて論せられたる問題の自然の順序關係により其教訓を再造するは望まじきものゝ如し、何とあれば其の特別の眞理を教へたまふ時機と語勢とは今日存せざる特別の事情によりて定められたるもの多ければあり

第一章 神に關する基督の教訓

吾人は自ら第一着に神に關する基督の聖語に注意するあり、而して彼は神が受造物に關係したまふことの外力めて神の性質を示さんとしたまはざりしことは特に吾人の注意を喚起するなり、若し今言ふ所に例外なるものありとせばサマリヤの婦人に「神は氣あり」(約四〇二四)といひたまひし聖語ならざるべからず、如何とあれば此聖語は眞正なる神は一定の地方に制限せられたまはず、反て敬虔なる人々の禮拜を受

神の本質は氣なり

けんとして至る所に存在したまふといふ理由を示さんために語りたまひしものなりやも知るべからざればなり神は氣なり然して氣は空間と必須の關係を有せざるものにして自ら純粹なる智能なり故を以て神の實在或は現存はエルサレム或はゲリジムに限られざるなり若し基督の聖語の意義は右の如くなりとせば假令基督が宗教的生涯の爲に其神を禮拜するに關して人々を教導し又其禮拜をして宇内に普からしめんとて此言をあたたまひしとするも亦間接に神の性質其物につき一の要用なる眞理を教へたまふなり今一步を進めて人類に關係する神について耶穌の教訓を考ふるに吾人は屢主は神を形容して王としたまふとあるを見るあり即ち主は「もし爾曹各心より兄弟を赦すに非ずんば我天の父も斯の如く爾曹に爲し給はん」といひ以て其弟子たちに應用したまひしとき其臣僕等と會計する王を形容する著しき譬諭中(太一八〇二三以下)に之をあたたまへり又其子の爲に婚姻の

神は王なり

宴を設け而して來客の中に禮服を衣ざるものを見其臣下に命じて「彼の手足を縛りて外の暗黒に投出せ其處にて悲しみ切齒する事あらん」といへる王を形容する他の譬諭(太二二〇二以下)に於ても之をなしたまへり又實に凡の福音讀者の熟知する言語なる「神の國」(太六〇三三全一二〇二八及び其他)を説話したまふ凡の所にも之をなしたまへり此句は前後の文に従ひて或は神が帝王たる權威を有したまふことか或は神が斯る權威を行ひたまふか或は其權威の下にある凡の邦と凡の民とを意味するなり

又「王」なる名稱は疑もかく稍譬諭の意義を以て神に應用せらるると雖も其意義が此の如く應用されたるときは其文字の字義に基かざるべからず而して吾人は此王なる文字上の意義を學ばんとせば只基督時代に近く生活せし著者等特にユダヤ人種の著者等の此語の使用方によりて學ぶとを得べきのみ彼の著者等の記述する所を研究すれば王た

神の品性

る權威は普通に最上權として言ひ表はされたることを見るを得るあり、即ち王は立法者、行法者、赦を行ふ者なりき。又王は秩序、正義、安全、平和の源頭なりき。法律は彼より發せられ法律の神聖は彼によりて保たれ、善王は其民の最大なる祝福なりき。耶穌基督の教訓に神は王なり神聖仁恵にして慈悲あれども亦王たる權威ある者として記されたり、即ち其名は神聖なる者にして其統治は愛慕せられ其意志は行はるべき者なり、山上の垂訓に於て説明せられし如く其王國の律法は之より以前に知られたりし如何なるものよりも遙に人心に透徹するものにして精氣的のものなり、此律法は内部の正義を求め、憎惡を以て殺人主義として之を咎め、淫欲を以て發端的姦淫として之を批難し、神の名を潰すこと、人を誹謗すること、を禁じ、損害を與ふる人を許し、隣人を愛し、迫害する者の爲に祈ることを命じ、此故に爾曹何にても人々が爾曹に爲さんことを欲することは人にも亦之を爲せ是律法と預言者との意

神の王たること及び基督の王なること

なり、どの金言を宣傳するなり、されど此王の律法は義務に付き右の如き高き標準を有するも、之に加ふる希望の言語を以てせるを知る、何となれば、我儕が負債ある人々を免し、如く我儕の負債を免し給へ〔太六〇一二〕と祈るべきことを王の臣民に命せしと同時に、爾曹もし人の過失を免さば天に在す爾曹の父も爾曹を免し給はん、されど爾曹人の過失を免さずば爾曹の父も爾曹の過失を免し給はじ〔太六〇一四、一五〕なる明瞭なる語を加ふればなり、此の如くして彼の道義的律法即ち十誡は凡て其固有の廣さと清さとを以て再び確立せらるゝと同時に〔太五〇一七以下〕罪の赦は凡て此王の信實なる臣民に保證せられたり、猶又其人民の王として神を表示することは決して基督の王たること、相諧はざるものに非ず、何となれば他人を通じて爲すところのことは自ら之をなすありといふは理に叶ふことなればなり、神は耶穌基督の身位を通じて統治したまふ。蓋し耶穌は身自をさして神より其權威

をうけ(太二八〇一八約五〇二二二六二七)神の代りに統治し(約一七〇一、二、四、二二)人々に神の品性を示し(太一一〇二七約一四〇十)且凡の關係に於て神の旨をあす(約八〇二九)とのたまへり。

神は父なり

此故に耶穌が自ら來りて設立したまひし王國即ち彼が其中に政を行ひたまふ所の王國は神が之を統治したまふといふ斷言によりて彼の教訓のうちには不調和と混雜との元素が編入さるゝとなし。何とあれば彼は神の副王にして神と全く一致して凡の事を爲したまへばなり。又基督が多くの處に神を父と稱へたまふことを見る、而して基督が人々の熟知せる斯る言語を此の如く用ゐたまひしとき其詳細の意味を學ぶことは明に願はしきことなりとす。吾人は安らかにこの語の譬諭的の意味を以て神に應用せられたるものと假定し得るなり、換言せば誤謬の虞なく神の父たることは凡ての關係に非ずして只或る關係に於て人間の父たることに似るなりといふことを假定し得るあり。吾人は

亦ヘブル、ギリシヤ、ロマの家族に於ける所謂る父たるの位置より此名稱は王の名稱と相對して少しも不相應ならずと推察するを得るなり。如何となれば父たるものは家族の適當なる首長にして其家人の上に正當なる權威を有すべきものと認められたればなり。子は其父を敬ひ僕はその主を敬ふされば我もし父ならば我を敬ふこと安にあるか、我もし主ならば我をおそるゝこと安にかあると萬軍のエホバいひたまふ(馬一〇六)されど王たること父たることの觀念は全く相容るゝものあること明白あると同時に二語の同意義にあらざして、耶穌基督が王なる語によりて明に表出したまはざりしことを父たる言語によりて表出せんとしたまひしことを見るは容易のことなりとす。是れ愛即ち信實、不利己、永遠の愛なり、王は其民に對して賢明にして思慮あり偏頗なきものなりといへども父は之よりも勝らんことを望まるとなり、父は深厚にして盡るなき愛情を以て支へられたる大なる耐忍と自制とを

以て其子女の幸福を求んことを望まると此數語たる之を記すことは容易なりといへども父たるの心によるに非されば容易に之を説明する能はざるあり。

父なる語は關係を示すものなるを以て神に付て用ゐらるゝときは直に何人の父として基督が之を用ゐたまひしかどの疑問を想起せしむ此疑問に對する答案は三重に分たるべし。第一、基督は神を自らの父と稱へたまへり、若し其の神に對し給ふ關係が他人の神に對する關係と異ならざりしとするも斯く語りたまふことは理に合へるものとせられ給ふべきなり。是れ恰もパウロは假令神若くは基督に對する其關係は實に他の信者の神と基督とに對する關係と異なりと思ふ能はざりしといへども神を稱して「我神」(羅一〇八腓一〇三、四〇一九)といひ、又救主を稱して「我を愛し我爲に己の身を棄てたまひし」(加二〇二十)ものといふことを得たるが如し、然れども假令耶穌が屢神を吾父と稱へた

耶穌基督の父

ふ事實其物は特別の意味を以て神を其父なりと知りたまひしことを證明せずとするもその弟子等に相共に「我儕の父よ」(太六〇九)と祈るべきことを教へたまふと同時に決して此方法に於て自己を彼等と結合したまはざりし事實は以て己が神に對して子たることは彼等の神の子たること、異なりしを知りたまひしといふ意見に勢力を與ふるなり。此關係は猶一層下文の次第によりて明に示されたり、即ちユダヤ人等が「神を己の父といひ以て自ら己を神と均くすればなり」(約五〇十八)といふべき機會を彼等に與ふる程基督は神を吾父と呼び己の行爲を以て神の行爲に合同することを示せる明瞭なる語勢を用ゐたまひしこと及び神の臣民等をして實に自由なる子等(約八〇三六)として神の家族に入らしむる所の「子ありと自己を呼びたまひしこと」是なり。

第二、基督は神を基督信者の父と稱へたまふ、是山上の垂訓中の模範的祈禱に用ゐたまひし句「天に在します我儕の父よ」より推察せられうべ

眞正なる基督信者等の父

し。如何となれば其時は彼が明に其弟子たちに祈るべき方法を教へたまひ(路一一〇一以下参照)且彼等は御政を臨ませ給へ御旨の天に成る如く地にも成さしめ給へ又我儕が負債ある人々を免し、如く我儕の負債を免し給へ(太六〇九以下参照)といふとを心より祈ることを得し人々あれば也。彼等は御政治に属する子等也(太一三〇三八)又彼の兄弟なる此等の如き人々に曰く我爾曹の父たる我父爾曹の神なる我神に昇らん(約二十〇一七)と此故に耶穌が眞理を信じて之に従ふ凡の者には神が其父なるを教へ給ひしことは福音書の證明が之を確證し得て餘りありとす。爾曹の仇人を愛しみ爾曹を責むる者の爲に祈れさらば爾曹は天に在す爾曹の父の兒輩とならん彼は其日を惡者と善者との上に昇らせ又雨を義者と不義者との上に降らせ給へばなり(太五〇四四以下)との語が吾人に想起せしむる如く此父子たるの關係は道德上の類似に歸するものなるべしといへども必ず最も利己心なき愛情最も

も丁寧なる注意尤も完全なる柔和を含有するものなり。我彼等に居り爾我に居りたまひて彼等が一に全うせられん爲め且世が爾の我を遣したまひし事と爾が我を愛したまふ如くに彼等を愛し給ふ事とを知り得んためなり(約一七〇二三)

第三、基督は惡しき者をも除くことなく神を凡のもの、父と稱へたまへり。是れ或は凡の人の造主にして勿論深く彼等の安全を慮りたまふ者と想ふ事實に歸すべし。ルカは耶穌の先祖たちの系譜目錄に於て此語の用法を證明せり。そは耶穌を以て始り人々の想にすればヨセフの子あり、ヨセフはヘリより生れ、次でエノスはセトよりセトはアダムよりアダムは神よりありと其系統を遡ればなり。此系譜中には神に對するアダムの關係はアダムに對するセトの關係と同様に指示されたり、されどアダムに對する神の關係はセトに對するアダムの關係と凡の點に於て精密に同一なりとルカは考へしと假定することは決して瞬

時も維持さるゝ能はざる説あり、只ルカはセトの生命はアダムより生
 せし如くアダムの生命は神より生せしと考へしからんと吾人は之を
 憶測し得るのみ、親たる愛の觀念は毫もルカの思想の内にあらざりし
 かも知るべからず、ルカは只人としての耶穌と人間との結合及び人間
 と神との結合を指示せんと欲せしかも知るべからず、然るに基督が或
 る意味に於て神を以て萬民の父とし且萬民の幸福の爲に深慮をなし
 たまふ者と想像したまひしとは既に引照したる句中(太五〇四五)又放
 蕩息子の譬諭(路一五〇一一—三二)及び約翰傳中にある驚くべき句(其
 三〇一六等)に由て明瞭ありとす、何となれば此等の言語は父と己とに
 つき基督の教訓の精氣を表すものなるとは四福音書を讀む人の之を
 否む能はざる所なればあり。

意味は其
 なれり

然れども耶穌の此教訓は善人と同じく悪人にも同じ位置を神の前に
 與へ或は信者たる者が神の兒輩たると同一の意味にて基督を信せざ

る者を神の兒輩と稱ふるもの也と了解すべからず、何とあれば是れ同
 一の問題に於る大教師の聖語をして撞着せしむべければなり、抑も禍
 なる哉爾曹偽善者なる書士とパリサイ人よ、蛇よ蝮の子孫よ、爾曹は如
 何で地獄の刑罰を免れんや(太二三〇二七以下)の如き言語を以て耶穌
 基督が神の兒輩に語りたまひしと想像するは不合理なりと主張する
 ことなくとも、斯る人々の神に對して子たることを明に否む所の言語
 は基督によりて語られたり、即ち或る時ユダヤ人數人が「我儕には惟一
 の父即ち神あり」といひしときに耶穌答へたまひけるは「神若し爾曹の
 父ならば爾曹は必ず我を愛せん……爾曹は爾曹の父讒鬼よりなり
 爾曹の父の欲は爾曹之れを行ふことを好む……神よりなる者は神
 の言を聽く、爾曹は神よりに非ざる故に之を聽かず」(約八〇四—以下)と、
 此御答は善人が神に其兒輩と認めらるゝと同一意味にて悪人は其兒
 輩と認められざる事實を確定するなり

此故に神の父たることは基督の教訓の甚だ緊要なる部分にして神の愛を切言するの故を以て人心の愛慕に適すといへども最も高尚なる意味に於いては萬民に對する神の關係につき神の父たることを斷言し或い其王たることを等閑に付する程神の父たることを以て神に關する唯一の重要なる真理として主張すべからず如何となれば他の宗教の凡の信用すべき教師たちの教に於ける如く耶穌基督の教訓に於ても神は神聖にして且善あり正義にして且仁なり其道義的政事の下には生の道ある如く亦死の道あればなり吾人は進んで耶穌基督の教訓を研究せば全く明瞭に此理を知ることを得べし。

第二章 人に關する基督の教訓

科學的に
非宗教的
な

基督が當時の人々の品性及び行爲に應じて其教訓を施したまひまことば福音書研究者の注意する所なるべし此等の人々は政治、道德、及び

宗教上の議論には趣味を有せしかども人性に就て科學的研究をなさんとする好奇心なきイヌウエルの普通の人民なりき彼等は解剖學健全學等に付て教を施さるゝ所なく此等の科學に付て無知なるも彼等の正直若しくは有用なることには大なる害なかりしなり此故に吾人に傳へられたる耶穌の傳道事業の記録中に耶穌は彼等の人間としての性質の才能品格に關する教育を其弟子等に授けたまふとわらずして其目的精氣に於て基督の教訓は殆んど専ら宗教的なりき若し嚴格に宗教的ならざる人生の状態を照すことありとせば是れ偶然にして其教訓の主要なる目的にあらざるなり然れども吾人が進んで彼が教へたまひし人々の状態に對する聖書を研究するに先ちて此偶然の光明に付て簡單なる考究をなすの必要あるなり吾人は既に基督が神に似たることを以て人間の品性の理想となしたまひしことを見たり其弟子たる者の天に在す父の兒輩たらんが爲に其仇を愛し其迫害者の

人は神さ
道義上の
一致をな
し得る事

爲に祈るべきことを勧められ、又實に天の父の全きがごとく全かるべしと勧められたり(太五〇四八参照)此聖語は儘に人たる者は愛心と行爲とに於て神に結合し得べき魂即ち神が見たまふ所の者を見神が愛したまふ所のものを愛して天の所に至るべき魂を有することを意味し且同一の垂訓中にある「心潔き者は福あり其人は神に見ゆべければあり」といふ發端の聖語中にも意味せられたり、何となれば神に見ゆべしといふとは神の思想と其意志とを了解し各其限ある量に従ひて神の目的に與り神聖なる歡喜を以て神の聖旨の成就をたのしむといふよりも他に深き意味あることならざるべければなり、此故に假令耶穌は創世記にある「神其像の如くに人を創造りたまへり」(二〇二七)といへる言語を用ゐたまはざるも人間の品性の標準を以て道徳上神に類似することなりと定めたまひ且勿論人の此類似に達し得ることを確證したまへり、是れ人には創造主と相類似したる最高き價值ある悟性及

限りなく
存在すべし

び感覺あるに依るにあらすして何ぞや、然れども若し基督の教訓によりて人の性質が若く高く置かれたりとせば其聖言中に時々人の限なき存在を暗示することあるを望みうべし、斯る暗示なきに非ず、然も吾人の思ひ得たるが如く大抵の例に於ては此暗示の當時の弟子等に關係せり。

我父の家には多くの居室あり、然らざれば我先に爾曹に告げしならん我先に爾曹の爲に處を備へに往く、而して若我往きて爾曹の爲に處を備へせば復來りて爾曹を我に取らん是爾曹も我居る處に居ることを得ん爲なり(約一四〇二、三)我の復生なり生命なり我を信するものは死ぬるとも生さん(約一一〇二五)斯て貧き者死にければ天の使等に携へられてアブラハムの懷に至る(路一六〇二二)是等の者は往きて無限刑罰に入り義しき者は無限生命に入らん(太二五〇四六)夫れ神は死にし者等の神に非ず生ける者等の神なり、そは神の前に於

ては皆生ける者なればなり(路二十〇三八)もし爾の目翳を蹟かせざば、
抜出して之を棄てよ。兩目にて地獄の火に投入れるより片目
にて生命に入るは爾曹の爲に善し(太一八〇九可九〇四七)

自覺的存在に
身體に關係する
事

されば未來永久の存在即ち道義上の身位として魂氣の自覺的生命ある證據を基督の聖言中より搜出する解釋の正確なるを疑ふべき理由
あらざるなり

然れども基督は自然の死を以て自覺的存在の終末となしたまはずや、
然り終末とあしたまふされども是れ只身體組織によりて定められたる
自覺を指すのみにして、一層深き魂の生命を指すにあらず。此生命は幽
冥或は樂園パラダイスに於て綿々として絶ゆることなきあり

身を殺せども魂を殺すこと能はざるものを懼るゝ勿れ魂と身とを
地獄に於て亡し得る者を懼れよ(太十〇二八參照路一二〇四)爾は今
日我と共に樂園に在らん(路二三〇四三)貪しき者死にければ天の使
等に携へられてアブラハムの懷に至れり富る人も死にて葬られし
が陰府にて苦み目を擧て遙にアブラハムと其懷に居るラザロとを
見て(路一六〇二二二三)

此等の數句より發する光明の裡には耶穌は形体上の死を以て身位上
の存在に終を告ぐるものと考へたまひしと思ふことは吾人の爲し能
はざる所なるが如し。彼は身體を以て其人なりしが如く語りたまはず
して寧ろ其魂、其意、其心を以て其人と認めたまへり。内なる生命を以て
凡の善惡の行爲の根元とし強く之を論じたまふことは身體に比して
魂に歸するに最上にして殆んど獨立ある位置を以てし給ふこと、相
適合するなり。若し斯る犠牲によりて魂の幸福を得られれば手足罪を
犯さば手足をきりて身體をも亡ぼさしめよ何となれば神の身位と肖
像とは魂の中にあり若し必要あらば魂は己の爲に他の一層精好なる
体を着用するを得べければなり

然れども耶穌は人間の罪惡に關して何どのたまひしか。抑も耶穌の異邦人の罪過に付き語りたまひし所少けれどユダヤ人の罪過につき多く語りたまへり。耶穌は「我はイスラエルの家の迷ひたる羊の外に遺はされず」(太一五〇二四)と公言し給へり。此故に吾人は耶穌の聖言は大體ユダヤ人に付て語りたまひしを怪しみ、又所謂の撰民の罪過に付き語り給ひし所より考へて人間の罪過に付き其信に給ひしことを推察せしめらるゝの故を以て啞くべからず。抑も耶穌基督は人の心は神の前に罪過あるものと認めたまひしことは基督自身の聖言によりて明瞭なりとす。何となれば聖言によれば人々の道德上の目的と運用とは匡正せられんことを要すればなり。此故にガリラヤに於ける其傳道事業の始に當て人民に宣傳して「爾曹悔改めよ。天の政治は近きにあればなり」(太四〇一七)とのたまへり。其後シロアムにある塔の倒れしによりて十八人死せしことを指して「我爾曹に告げん。然らず。爾曹も悔改むるに

非んば皆必ず斯の如く亡びん」(路一三〇五)と其聽衆にのたまへり。然して悔改は内なる人の變化即ち魂の道德上の目的と調子との根本的變化なり。此故に悔改は耶穌が嘗てユダヤ人の宰なるニコデモに語りて「人もし新たに生れずんば神の御國を見ること能はじ」(約三〇三)と教へたまひしことを悉く含有するなり。何人にてても若し神を知り若くは其王國の一民たらんとせば、物質的生命は其終を告げて眞正なる精氣的生命は其端を發せざるべからず。此に於て嚴格にして碩學なる學者は其賤視したる隣人即ち税吏より優るところなし。斯る聖言は眞正ある宗教的生命は人間たる父母より之を承け繼ぐものにあらずして神の氣の作用によれる魂の新なる道德上の目的運用に始るとを教へたまふなるべし。人々に此變化が生ずるに非ざれば此世に於て神なきなり。基督は大底時として直接に又數其教訓の特質によりて、其教訓を施したまひたる人々の罪過を認定したまひしことは丁寧なる聖書讀者の

注意する所なるべし例へば爾曹惡き者ながら兒童に善物を與ふることを知らば況て天に在す爾曹の父は求むる者に聖氣を與へたまはざらんや〔路一一〇一三〕又青年の幸に「何ぞ我を善きと稱ふるや善者は惟一の神の他にあるとなし」〔路一八〇一九〕と曰へり詳言せば如何なる人も道義上完全なる者に非ず只神のみ善の標準なり故に人々善からんとせば其品性上神の如くなるべしされど人々は然せずとのたまひて他の所に於けるが如く此處に於ても青年が耶穌は尋常人間なる師ならんと假定したる所に基きて之に答へたまへり此聖語中に於て道義上の曲事は各人の上に負はせられたり

右の教訓の光明に照すときは他の聖語即ち「蓋人の子は失せたる者を尋ねて救はんために來ればなり」〔路一九〇十〕又「我來りしは義者を招く爲に非らず唯罪ある者を招きて悔改めさせん爲なり」とあるは人間の一部は罪人にあらず迷へるものにあらざるが故に基督に頼る救の必

例外なき事

要あらずとの意味を以て之を解釋すべからず反て寧ろ基督が來りて悔改に招きたまふ凡の人類は罪の中に迷ひ從て最深く其救拯の幫助を要するものなることを意味すと解釋すべし況て迷ひたる羊の譬諭より以下の聖言即ち「我爾曹に告ん斯の如く一人の罪人悔改めなば天に於ては悔改むるを要せざる義者の九十九人を喜ぶよりも勝りたる喜悅あらん」とあるは人類の大多數は正義にして悔改の要なきものなりといへども百人中の一人のみ罪の中に迷ひて悔改むるの必要ありと教へたまひしと解釋するを得べけんや此等の聖語はパリサイ人の自ら義とするものに對して陽に讓歩の形狀を裝ひたる嚴格にして憤慨したる抗論なりと考ふるは遙かに道理あることなりとす彼の祈禱せんとて神殿に上りしパリサイ人と税吏とに關しての譬諭〔路一八〇九一四〕と之を比較せよ又一説あり即ち路加傳十五章の七節にいへる喜びは天に於ける喜びにして天にある者は完全なる正義の例は甚

だ普通なるを以て之になれて其何れの例も罪惡滅亡の途より作聖救拯の道に歸る者ある時の如き喜びの感情を惹起するものなし。ブリス氏といへるは亦他の一説明として想起せまめられたり

若今基督は如何ある罪人につき最大ある憤慨を以て語りたまひしかと尋ぬる者あらば吾人は之に答へて曰ん其心は強奪不潔罪惡を以て充ちあがり高聲に正義を公言する偽善者につき、特にモーセの位に坐して他人の肩には堪へ難き重荷を負せ自己は指一つを以てすらも之を動すことをせず、寡婦の家を呑み又詐りて長き祈禱をなし、會堂や龕庭に於て上席を好み、且人々にラビ、ラビと呼ばれんことを好み、一人の改宗者を得んが爲に周く海陸を巡り、薄香苗香芹の十分の一を納むれば律法の主要なる者即ち義と仁と信とを怠り、若先祖たちの日に生活したらんには預言者等の血に與ることなかりしからんと宣言せしかども實は己の時代の預言者と賢者とを迫害し鞭殺し磔にせんとした

偽善は特
事に罪なる

罪の程度
は其知識
に應ずる

りし者等(太二三〇可一二〇三八—四十参照)につきてなりと。此聖語によりて基督は神聖なる嫌厭を以て偽善を睨み、且鋭利なる叱責を以て之を冒すものを戒めたまへることを示せり。然して吾人は之を怪むべからず何となれば宗教上の感情の虚偽又は假託の儀式は神を嘲りて以て人を欺かんと試むるものなりと形容するは適當なるべければなり。即ち是アナニヤとサツピラとの罪過にして神は唯一回のみ福音の時代の初に於て彼の懼るべき罰を以て之を咎むることを善と見たまひしものなりき、而して學者とパリサイ人とは共に一塊となりて特に此罪を犯せり。此故に彼等に對して懼るべき救主の叱責ありき

基督の教訓は人の罪過の程度を定むるに其爲すを怠りし義務に於る知識の程度に應せしむることは亦注意を惹くの價值あるなり。即ち神の意志を知ること完全あるに従て神の意志に背くの罪は重さを加ふるものなり、故に主人の心を知りながら準備せず其心に従はざる僕は

打たるゝこと必ず多からん。されど知らずして撻たるべきことを爲せるものは撻たるゝこと少からん。多く與へらるゝ者には多く求められん。多く托けらるゝものよりは人々多く取返さん。〔路一二〇四七、四八〕と記されたり。而して「されど知らずして撻たるべきことを爲せるものは撻たるゝと少からん」の聖語に於て耶穌の示したまひし者は其義務につき全く知る所なきものにあらずして幾分か之を知る者を指したまひしと假定する。大抵安全なるべし、換言すれば斯る者は其主の直接の命令に付ては知る所なければども其なせる行爲は道德上惡事たることに付ては全く知らざるにあらず、何となれば道德上の行爲の範圍に於て全き無知は甚だ稀にして若し全く無知あるもの存在せば道德上の行爲をなすを得ざらしむるが如く見ゆれども一部の無智は甚だ普通にして彼の惡事をあすものと罪を減することは屢あり得べければなり。此疑問は使徒パウロが巧妙なる文を以て羅馬書中に論ずる所

なり。一〇一八一二三全二〇一二一六而して律法上の知識に付き大言をなす所の學者等とパリサイ人との道義上の品性價值に付き本論の含有する所の意味は彼等に關する主の聖言を勉學する時に當りて輕々看過すべからざるなり。耶穌曰ひけるは爾曹若醫者ならば罪なきものを然ぞ今見ゆといひしに由て爾曹の罪は遺れり。〔約九〇四一〕人々の罪惡に關する耶穌の教訓の他の一は多く與へらるゝ者は多く求められん。と曰ひし句中より發見せらるべし、其有する凡の所有物を神より托せられたる人々は神の家宰ありといふ事實は大教師が一度ならず明に示したまふ所なりき。人々の有する凡の知識凡の家産及び凡の權力の運用は之を使用して利足を附して神に返納すべき。銀或は「金」を認むべし。此主義は二個の著るしき譬諭。太二五〇一四一三十路一九〇一三一二六中に證明せられ且人の子が其左にある者を捨つる理由は其既に行ひたることに由るにあらずして爲すべきことを拒み或

は之を怠りしによると曰ふ所の終末の日を形容したる記録(太二五〇三一―四五)中に證明せられたり。即ち是等の最も小き者の一人に爲さざりしは是我に爲さざりしなり」と。善きサマリヤ人と名付けられたる譬によれば旅人が盜賊に劫され路傍に倒れて死ぬばかりなりし時祭司とレビ人とは前後相續て此に來りしが彼を見て路の他側より過ぎ行けり、彼等は困める者に石を投じ或は誹り嘲るが如き殘忍なる惡人と看做されたるにあらず、彼等は只彼の危急を見るも之を助くることを怠りしのみ。嗚呼彼等の如きものは其れ幾何ぞや。基督の教訓によれば罪過の根源は心なりとあるは特に觀察すべきことなりとす。基督は税吏、娼妓或は盜賊たることを何人にも許したまはず、即ち此等を以て何れの處に於ても大に罪過の發表したる者と認めたまふと雖ども、恰も此等の外に神の怒を被る者なきが如く此等を以て罪の全部となしたまはずして其洞觀する眼力は内心を透して邪惡の根源を看破した

即ち心の根源

まへり、即ち蓋人の内即ち心より出るものは惡念、密通、盜竊、兇殺、姦淫、貪婪、邪曲、詭騙、好色、嫉妒、褻瀆、驕傲、狂妄、おどなればなり(可七〇二―二三)とあるが如し

凡て以上の論は神の律法の概要即ち人生に於て凡て最も美にして最も高尚なるものを包括する一語即ち愛なる語によりて説明されたり。「爾心を盡して、爾の神ある主を愛し、且己の如く隣の人を愛すべし」と之より劣る者は罪過にして聖き律法を犯すなり。外形上の儀式は一として之に代り得るものなし、神は心を見たまふ、神の前には愛の足らざることは行爲に美と價值とを加ふるもの、足らざるに同じ。

第三章 基督の身自らに關する其教訓

此章に於ては人を教ふるには雷に言語によるのみならず行爲によるを得るといふ事實を其心に留むること特に緊要なるべし。蓋し官司た

行爲に由りて之をなしたることを

る人は單に其言語によるのみならず其行爲によりても明に其特權を主張し或は其義務を限定し得べく、又何人も沈黙を守るは反て意味深き時あること屢なればあり。例之ば耶穌が議會サンヘドリンの前へ、ロデ王の前及び時にはピラトの前に沈黙したまひしことを考ふべし、又誰かパリサイ人が姦淫せるときに捕へられたる婦人を訴へしときに耶穌が俯して其指を以て地に畫きたまひし理由を知るを欲せざらんや、約八〇六—八如何となれば假令此記録は約翰の筆になりしや否やに付ては疑ひあるも眞實なる形跡を負へばなり、抑も偉大なる魂魄は自ら其特質を其生涯の中に發現するものにして、言語は唯其生涯を世間に發表して其内部の品質を示す一方法たるのみ

其人性を
備言した
まふ

若今吾人は右の廣大なる論法に従ひて基督の身位に關する證據を研究せば自から其證據は基督の完全なる人性を備具したまふことを明示するを見るべし、換言すれば其證據は基督の人性の完全あること、

其邪惡に染まらざることを證明するを見るべし、基督は自己を「人の子」と呼びたまへり、實に他の名稱より自ら此名を用ゐたまふこと數々にして其傳道事業の大部分の間に他の名稱よりも之を以て適當なるものと思惟したまひしもの、如し何を以て然るか、或る人は基督の一層高尚なる性質即ち神性あるの事實は其事業の進歩に従ひて漸々に其意識に現出せしならんと假定して以て之を説明せんとせり、他の人々は基督が降りて人間となりたまひしことは新奇なるを以て其心にも其己を現したまふにも人の子たることに重きを置きたまひしならんと假定して以て之を説明せり、他の人々は人をして其神性を想起せしむる何れの名稱よりも此名は其心の謙遜に對して一層相當なりしと假定し、或る人々は此の名は彼の著名あるダニエルの預言より借り來りたるメシヤの特別の名稱なりしと假定し、又或る人々は基督は其傳道事業の終末に近づくまでは注意して其神の子たることを直接

に要求することを避けたまひ、然して假令所謂「人の子」なる言語によりて普通の人々の子たることより區別したまひしも人々をして自ら人の子たること、其人たるの性質とに注意せしめたまひしと假定し以て之を説明したり

吾人は此最後の説を採用して之に先だつ何れの説よりも勝りて信を置くに足るものとせば基督が「人の子」なる名稱を用ゐたまひしことは自ら眞の人間より生れたる者にして其要用なる諸能力及び其諸感覺の性質に於ては他の人々の如くなれど又人類を代表する所の人物なることを要求したまひし證據を發見するあり。如何とされば此句に冠詞と共に用ゐたるギリソキ語 *Anthropos* 即ち人といふ語は人類としての人即ち他の動物より區別したる意味を示し、又子なる語の前にある冠詞は英語に於ける *The* の如くギリソキ語に於ても同一の力あるものを用ゐられたればなり即ち此人の子は或る意味に於て他の凡の

の子より區別せらるべきものなることを示す。而して此名稱の此最も明白なる意義より離れ去るの理由なきが故に此名稱に訴へて以て基督の人性の證據となすに躊躇せざるなり。耶穌基督は己自らを呼びたまふ時屢此名稱を用ゐたまひしを以て自ら人性に相當したる品格を生れながら稟有したる眞實の人間なることを證明したまへり。耶穌は又或る時己を「人」と呼びたまへり、此時に當りては其傳道事業は終末に垂んとしてユダヤ人等は其生命を奪はんとしつゝありしかど亦非常の自負を以てアブラハムは彼等の先祖なることを主張せる時ありき。斯る事情によりて耶穌は「爾曹もしアブラハムの兒輩ならばアブラハムの行ふ所を爲すべき也、然ど今爾曹は神より聽きし眞理を告ぐる人なる我を殺さんと謀るアブラハムは之を爲さざりき、爾曹は爾曹の父の行爲を爲す」約八〇三九、四十とのたまへり。耶穌基督の如く若く注意して凡の言語を斟酌したまひし者が自ら眞實に然りしにあらざれば彼

人生して
生長せし
生活せし
たまひし
こと

自らを「人」と稱へたまひしとは信じてたきことなりとす
然して其人性に付き基督の明瞭なる斷言を除きても、耶穌が己自らを
全く人間として其弟子等に現したまひしことは凡の福音書研究者に
確實あることなるべし。基督は他の人類の如く小兒より生長して成人
に達したまひ或は食ひ或は飲み或は眠り或は聽聞觀察談話し亦他の
人々の如く時には花卉を觀時には山谷を跋渉し時には麥圃葡萄園の
間を徜徉し其弟子等と共にユダヤよりサマリヤに往きたまふ時に當
りては疲勞してヤコブの井側に坐し其勤勞して罷盡したまふ時に當
りては暴風怒濤の間に舟中に熟睡し其飢ゑて食を望みたまふ時に當
りては歩を鬱葱たる無花樹の下に枉げたまへり。彼は亦人たる者の如
く時に驚き時に喜び時に怒りの態を示し恰も能く人氣の作用に同情
を有たまひし如く人の理性良心希望及び畏懼に應じて其言語を用
ひ又其友たる者は一人として其舉動の中に人たる同情の缺乏を認め

人生して
試みられし
たまひし
こと

しことなき程若く自然に其友を愛したまへり。故を以て人々は實に耶
穌を以てヨセフとマリヤとの子なりと思へり(約六〇四二參照)而して
彼は此幾分かの誤謬を正さんと力めたまはざる者の如し、蓋各事皆其
時あり、基督の復活の後及び其復活が多數の見證によりて證明せられ
たる時右の如き誤謬を正したまふとは一層容易なるべければなり
基督の試練を受けたまひしことは其人性を具備したまふこと、の實際
にして完全なるを預想せしむるなり何となれば若其魂氣を除きて其
身体のみが其人たるの全部なりしとせば此試練は説明しがたきもの
となるべければなり。彼の荒野に於る其試練の福音上の記録は基督自
らの聖語より之を得られしものと假定せしめよ。そは吾人は他に何人
も之を報告するを得たるものあるを知らざればなり。彼は四十日四十
夜斷食し然る後飢ゑたまへり、故に惑はず者彼にいひけるは「爾もし神
の子あらば是等の石の麪包となるやうに命せよ」然れども耶穌は「人は

麩包のみにて生きず唯神の口より出る凡の言によりて生くべしと録されたり〔太四〇四〕と答へたまへり。此時に當りて試練の殊別なる勢力は飢餓の恐るべき感覺に乗せしなるべしと雖ども、其勢力の或部は教主が一言を以て其飢を飽かすの力を有すといふ確信に乘せしと想像するを得るなり、果して然らば吾人は基督の人性は身体と魂氣と共に完全に備具せるものと考へざるべからず。何となれば吾人は神氣が身体の弱點によりて烈しく試みらるゝものとは適當に想像する能はざればなり。サタンが用ゐし次の二試練は吾人の身体的弱點よりも特に一層吾人の精氣的弱點に訴へ且一層基督の人性を備具したまふことを指示するなり。

右と同一の教理は其未來の出現の時日に關しては知る所なしとのたまひたる其自白(可一三〇三二)の中に含有されたり。基督の身位を以て神人兩性を備具するものなりと信する人々は皆基督の意識の法則動

其知識に制限あることを承認したることを承

作に一樣の解釋を下すことは決して能はざるべしと雖要するに凡て基督の知識の制限あるは人間の諸才能が其意識の範圍内に現存せるに由れりといふとは相共に一致すべきなり。此故に吾人は右の一事に於る其知識に畫然たる制限あることの自白に訴へて基督の唇頭より出でたる其實際に人性を有したまひし證據とするなり。之に由て直接及び間接に耶穌基督は自ら人間家族の一人にして其來りて救はんことを公言したまへるなり。基督の教訓の此部分は其友なりと告白する凡の人々凡の宗派の是認する所なり。基督は人間以上の者ありしといふことを拒む所の多くの人々すらも事實上單に人間たる基督の精氣と其生涯とを熱心に賞讃するなり。然して基督は又自己を神なりと稱へたまへり、故に吾人は今其教訓の此部を研究せんとす。勿論吾人の研究法は彼の人性に付ての證據を求むる方法と同じく公明正大なるべし。基督が依て以て自らを斷定し且

又其神性を確言したまひしことを

表示したまひし各言各行は此部に於て丁寧之を計定すべし然れども吾輩は只若干の標本を呈出して福音書中に保存されたる右と同様なる他の行爲言語を連想せられんことを讀者諸君に請はんとす而して猶又耶穌が傳道事業の半以上の間には豫言されたるノシヤにして神の眞の子として受けらるべき權利を有したまふことを明に斷言すること故に謹しみたまひしものゝ如しと豫想せられんことを望むなり然れども此時の間に漸々十二人の眼目を開き自らベテロの言即ち爾は生る神の子基督なり(太一六〇一六)を用ゐて告白せしめんとしたまへり。

神を其父
と呼びたまふこと

基督の聖語を考ふれば既に彼は神を其父と呼び且斯く呼びたまふこと數々にして己に對する神の父たることは格外無雙にして基督信者等又は他の人々に對する神の父たることより區別し得べきものと考へたまひしことを示す方法を用ゐたまひしことを見たり馬太傳に保

存せられたる聖語は實に之を證明するものなり

父の外に誰も子を知る者なし又子及び子の示さんと欲する所の者の外に父を知るものなし(一一〇二七)

右と同様の聖語は約翰傳に記されたり

是人父を見しといふには非ず唯神より來れる者のみ父を見しものなり(六〇四六)此に於て人々曰けるは爾の父は何處に在るか耶穌答へたまひけるは爾曹は我を知らず又我父をも知らず爾曹もし我を知りしならば我父をも知りしならん(八〇一九)何人も我に由らで父に來るものなし、爾曹若我を知りしならば我父をも知りしならん……我を見し者は父を見しかり何ぞ我儕に父を顯せといふや(一四〇六一九)奴隸は何時までも家に止らず子の何時までも止るあり此故に子若爾曹を自由ならしめざば爾曹は眞に自由の者とならん(八〇三五三六)

凡て此等の聖語は甚だ明亮にして他の意義なきなり。若耶穌が其劣れる性によれば人よりなるが故に人の子なるが如く其優れる性によれば神よりなるが故に神の子なりとせば右の引照の聖言は贅語に非ずして自然の理なり。そは其神性も其人性の如く實際に且十分に耶穌の表示したまふ所なるが故に其神に對する關係は人類に對する其關係を示すに用ゐる如き畫然たる言語によりて他の人々の神に對する關係より區別せられしは怪むべきことにあらず、換言すれば明に人の子と稱へたまひし如く亦明に神の子と稱へたまひしなり。前の引照の諸聖言に加ふるに他の人々が用ゐたる相似たる言語を採用して語りたまひしものを以てするを得べし例之ばペテロの告白「爾は生る神の子基督なり」に答へて耶穌は「バルヨナ、シモンよ爾は福なりそは之を爾に示す者は血肉に非ず天に在す我父あればあり」(太一六〇一六、一七)又議會の問「爾は神の子なるか」に答へて「然り爾曹のいへるが如し」(路二二〇

其神の子たることを告白したまふに等て弟白を採用了

七十)と曰へるなどなり。馬太の記する所によれば人をして議會の此問は宣誓の形式を以て祭司の長が問ひしもの、如く信せしむ故に耶穌の答は見證者たる生ける神の前になしたまへるなり(太二六〇六三、六四)此等の句と共に「ペテロ」が十二人を代表して耶穌の問「爾曹も去らんと欲するか」に答へて「主よ我儕誰にか往かん爾は無限生命の言を有ら給ふ且爾は神の聖者なるは我儕信じて之を知る」(約六〇六七、一六九)といへる句を連想しうべし此句は實に活ける神の子なりと讀まる、普通英譯に於る如く改正英譯に於ては十分適當ならずといへども神に對し基督の子たることは特別無雙あることを示すに勢力なきものにあらず。何となれば今論する所の問題は神に對して基督の子たる關係の事實に關するにあらず。寧ろ其關係の特別の性質に關すればなり。若神に對する基督の子たる關係は他の何等の人よりも實際相異なりたるにあらざれば「神の聖者」或は「生ける神の子」なりと彼を稱ふる言語を

耶穌基督が採用したまふとは吾人の想像し能はざる所なり

且又第四福音中に父の働きを以て子の働きと同一視するが如き聖語を有する數多の句あり。其中の若干は子は父の旨を行ふといふよりも深き意味あらずといへども他の若干は二者の勢力相一致して相分つべからざることを意味するものなりとせば一層自然に解釋せらるゝなり。斯てこそ吾人は基督が誤解し能はざる言を以て語りたまひしことを知るあり

我常に其父喜びたまふ事を爲せばなり(約八〇二九)我もし我父の事を爲さずんば我を信することなかれ、されど若之を爲さば我を信せずとも其事を信せよ、是爾曹が父我に居り我も父に居ることを知り且悟り得ん爲なり(全十〇三七、三八)彼等(我羊)は何時までも亡びせ又我手より之を奪取るものなし、彼等を我に賜ひし我父は凡の者より大なり我父の手より彼等を奪得る者あり我と父とは一なり(全十〇

自らの働
さしたま
ふに同一

二八一—三十

理性を有する者にして神より劣れる者が右の如き言語を使用することありとは信すべからざるもの、如し、况や耶穌基督の如く若く謙遜にして克己なる者に於てをや、此故に萬事の原因として進化説のみを信する批評家は約翰の福音を以て歴史的ならずと批難するは大に怪むに足らざるなり。蓋し彼等の科學的信條を以て基督の事業言語に關する此福音の章句の明瞭なる意味を抹殺するよりも疑を此徧ねく是認さるゝ福音記者に置きて之を否むことの反て彼等の爲に容易なることなればあり

右の引照の聖語に結合するに基督の豫存を確定したまひたる若干の聖語を以てせざるべからせ、此等の中の最も明瞭なるものは恐くば基督がユダヤ人に「誠に誠に爾曹に告ん我はアブラハムの生れざる先より存るものなり」と公言したまひしものなるべし。此句中に於けるギリ

其豫存を
確言した
まふこと

ツキ語は十分に之を譯すれば、アブラハムが人となりし(生れし)前に我はありと意味する如く見ゆ、此句は甚だ著しきものにして吾人が判断し得る限りに於ては基督勿論其神性をいふは神の如く絶對的に存在したまふ者なることを教ふるあり、少しく此句に先ちて彼等に左の如くのためへり。

神若爾曹の父ならば爾曹は必ず我を愛せんそは我は神より出來ればなり我は自ら來るに非ず神我を遣したまひしなり(約八〇四二)然ぞ今爾曹は神より聽きし眞理を告ぐる人なる我を殺さんと謀る(約八〇四十)人父を見しといふには非ず唯神より來れる者のみ父を見し者なり(約六〇四六)

言は神と共にあり、言は即ち神なりき、又言は人となりきといへる約翰の教理(一〇一、一四)は右に引照せし如き斯る聖語の單純にして權威ある解釋あり

神權を要
求したま
ふこと

凡て以上述べし所に調和して耶穌は自己の爲に神たる權利を要求したまへり例へば馬太によれば凡の者は我父より我に任せられたり(一〇二七)又天の中地の上凡の權は我に賜はれり(二八〇一八)のためへり。是其教へに權威あると(約五〇二四)病者をいやし(太一一〇五)罪を赦し(太九〇六)惡靈を追ひいだし(路四〇三六)精氣的生命を與へ(約五〇二五、二六)死人を起し(約一一〇二五、二六)又審判を行ふ(約五〇二八、二九、太二五〇三一、一四六)權威を含有せり、此權威は其地上の傳道事業の間に其教授動作の方法の表示する所あり

耶穌は神の心意と計画とに參與したまふことは直接なるが如く、完全なる眼光を以て眞理を見たまふが如く、又其宣傳したまひし福音に付て疑ひたまふ所なきが如く語りたまへり。是故に吾人は天地は失せんされど我言は失せじとの聖言によりて愕然たらざるあり。其ガリラヤのカナに於る始の奇蹟の時より其十字架上の死の時に至るまで其唯

一の商議者は見ゆる者ありき、彼は其父と共にありて(約一六〇三二)其踐む所の道は其父より撰まれたまへり。其自己の聖語によりて吾人は其權威の父より彼に來りしと(太一一〇二七約五〇二二、二六、二七)を教へらる、されど此權威は何れの時如何なる方法によりて彼に與へられしかは基督之を告げたまはざるあり。然れども此權威は神よりいつる其神性の中に可能的に來りしこと、受肉降生の作用および其事實に於て彼の中にも來りしと、及び此權威は身位的に人性に結合するに當りて承認する限界に於て彼が用ひしとは推察し得べきことありとす、若し此假定にして誤りなくんば吾人は容易に「耶穌智慧も身の長もいや増して益を神の恩寵と人の愛情とをうけたまへり」(路二〇五二)とあること、彼は其傳道事業の終に近づきし時すら猶地上の働きに屬せざる多くの事を知りたまはざること(可一三〇三二)及び其人間たる才能の範圍内に於て聖氣の感化力を要したまふこと(太一二〇二八約三

惟一身分
を有し
自らを
表した
まふこ
と

○三四)を信じ得べきなり

耶穌基督が恰も單一なる意識と意志とを有したまひし惟一身分ありし如く己自らに付て語りたまひしことは之を考究するの價值あることあり、人の子は亦直に神の子なり。複數の代名詞を用ゐたまひし僅々の時には己自らのみならず他人或は他の人々をも指したまへり(約三〇一一、四〇二二、九〇四、一四〇二三等を除けば其餘は常に一身分を以て其弟子等及び他の人々に己自らを表したまへり。

第四章 聖氣に關する基督の教訓

主基督が聖氣に關して指示したまひしことは己自らに關する程屢ならずといへども、要用なる光明を與へ且精密なる研究に報ゆるに足る十分なる數あるなり。其公けある事業に就きたまひし後始めてナザレに行きたまひし時安息日に會堂に至りイザヤの書より「主の氣我に在

神の氣を
有せり
公言した
まふこ
と

す]との語を以て始めたる句を読み巻物を閉ぢて坐し[此記録は今日爾曹の耳に聞ゆる如く遂げられたり]と語り始めたまへり。斯して其自己の宣傳事業は神の氣に由て感動せられしことを確言せんとしたまひしことは明白なりとす[路四〇一六―二一]而して假令[蓋神は限量なく其氣を之に賜へばあり]とある約三〇三四の語は恐くは基督自己の語にわらずして只第四福音書を記したる者の證言なりしならんとするも吾人は主の愛したまひたる弟子より出でて基督の心を表示する言語なりと主張することを躊躇せざるなり。此句より稍後に耶穌は惡靈の首長なるベエルゼブルと協同して惡靈を追ひ出すなりといひてパリサイ宗の人々が耶穌を嘗しりしことを記せり、而して耶穌は此罵詈に答へて第一に其罵詈の固有なる弱點を指示し而る後[されど我もし神の氣に依て惡魔を逐出さば神の政治は既や爾曹に臨めり]と曰へり、假令假設的形式の言語を以て之を曰ひしといへども明に神の氣と協

聖氣に
りて奇蹟
を行ひた
まふこと

同して此等の奇蹟を行ひたまひしことを確言し、且更に進んで彼等が若く明に聖氣の協同に歸する所の作用を以て惡靈の協同作用に歸し以て救しを得られざる程の罪惡を犯すの危險に臨めりと教へたまへり[太一二〇三―三二]

又基督の教訓は聖氣を以て新生の根原となせり、人は水と聖氣とに由て生れずんば神の御國に入ると能はじ、肉に由て生るゝ者は肉なり聖氣に由て生るゝ者は氣なり[約三〇五、六]と、基督は明に聖氣の作用の不測なることを認めたまふと雖も其不測なるの故を以て疑惑と不信との十分ある理由とはなしたまはず、我爾曹が新に生るべしと爾にいひしを異ひ勿れ風(氣)は己がまゝに吹く爾其聲を聞けども其何處より來り何處へ往くを知らず凡て氣に由て生るゝ者は斯の如し[約三〇七、八]とのたまへり。

更生を以
て聖氣に
歸したま
ふこと

而して吾人は若救主の聖語につき約翰の解釋を信用し得ば主は信者

弟子等に
聖氣を約
束したま
へること

の生涯の良好なる結果は聖氣の作用に歸するものなることを教へたまふことを知るべし我を信する者は聖書に録されたる如く其腹より活る水川の如くに流れ出でん此言は彼を信する者の受んとする聖氣を指して曰ひしなり蓋耶穌未だ崇められ給はざるに由て聖氣未だ降らざればなり」と是弟子等が其心に聖氣の協同作用なくして信者となりしことをいふにあらず彼等を導きて聖き生活に於る遙に大なる愛樂及び成功に至らしむる所の聖氣の遙に多量にして豊に勢力ある感化の下に來らんとせることをいふあり此預言はペンテコステの日及び其後多くの使徒等並に之に次げる信者等の生涯の中に成就されたり又救主が其甦の後彼の階上の室に於て十一人に會し息氣を彼等に吹きかけて爾曹聖氣を受けよ爾曹誰の罪を釋すとも其罪釋され爾曹誰の罪を定むるとも其罪定められん約二十〇二二二三といひたまひしとき此精氣的賜物を一層洪大に彼等に賦與せられんことを指示し

特に聖氣
感動した
まひしこ
約束した
まひしこ

たまひしやも知るべからず弟子等が此賜物を賦與せられしとき之によりて神の前に人々を嘉納し或は擯斥する諸條件を定めるの機能を得しめられ且彼等の教訓は天に於て批准せられしなるべし此故に是約束は先に弟子等に與へられたるものにして又特に耶穌が賣られたまふ時の前夜になしたまひたる諸約束の撮要と復言となりき此等の約束は約翰によりて左の如く記されたり我父に願はん彼何時までも爾曹と共に居るべき他の慰むる者則ち真理の氣を爾曹に賜はん一四〇一六父の我名を以て遣はさんどしたまふ慰むる者即ち聖氣凡の事を爾曹に教へ又爾曹をして我爾曹に語りし事を悉く思出さしめん一四〇二六我父の許より爾曹に遣らんとする慰むる者即ち父より出る所の真理の氣來る時彼我に付て証せん一五〇二六然れども彼者即ち真理の氣來る時彼爾曹を凡の真理に導かん蓋彼己より言はず其聽く所をいひ且來らんとする

事を爾曹に示すべければなり、彼我を崇めんそは我より受て之を爾曹に示せばなり、父の有ちたまふ所の物は皆我物なり

此等の約束によれば自ら聖氣は眞理の氣として十一人に與へられ、助者代言者として彼等と共に留められ、新に基督の聖言を思ひ起さしめ、基督の性質事業につき一層十分なる教育を與へ、將來の事柄を示し、且生命の道に屬する凡の眞理に彼等を導きたまはんとすることを意味せり。使徒等の神感の問題に於ける此等の約束の趣旨は最も興味ありて重要なる者なり。若吾人が此等の約束の文字上の勢力より何物をも減去せず其約束がペンテコステの日の後使徒等の生涯中に成就せられしと假定せば、馬太、彼得、保羅、約翰の宗教的教訓の正直にして精密あることを拒むとは爲し得可らざる所なりとす。而して使徒等の宗教上の教訓の條項の中には、隨に只基督より與へられたる教訓の記録のみならず、神の旨を示す限りに於て基督の生涯、死、甦に關する記録も亦之あるべきあり(太十〇一九、二十路一二〇一二、一二參照)

基督は恰も聖氣は身位を備へたる者の如く、即ち己自ら及び父ある神より身位的方法を以て區別せられ得べきものとして之を稱へ給ひしとは之を觀察し得べきなり。此事は亦太二八〇一九に於る「故は爾曹往きて萬國の人々を弟子とし、父と子と聖氣との名に於て之を沈めよ」との聖語に依て一層明にせられたり。此句に於ては神は三位一体あることを明白に是認したまふもの、如く見ゆ、されど其性質の區別或は一體の理由を説明せんとしたまはざりしなり。

第五章 基督自己の事業に關する其教訓

此にいふ所の事業ある語は基督が人々の教主たる天職に屬する万事を指示する所の廣濶なる意義を以て之を用ゐたり。如何となれば、痛苦を忍び耻辱に堪ふるには重荷を扛げ、競走を試むるよりも意志の大な

る力行を要するものあることは何人も之を知る所なれば基督の行爲のみならず其痛苦を忍びたまふことをも示すに事業なる語を用ゐるは少しも不適當なる所を見ざればなり。今神學上の術語を避けんが爲に其教訓の記録中に示されたる事實に従ひて種々の方面より其事業を考究せんとす。

其事業の
献身的な
ること

基督の事業の献身的方面を觀察せんとせば其受肉降誕と其地上の生涯とが罪に迷ひたる人民を救はんが爲なりしことを自覺したまひたる事實上に於て之を見ることを得べし。例へば其弟子等に授けたまへる教訓の或部として「爾曹の中首領たらんと欲する者は爾曹の僕とあるべし、斯の如く人の子も人に事へらるゝ爲に來らず事ふる爲且己の生命を棄て、多くの人を贖はん爲に來れり」太二十〇二七、二八と記されたり。又基督自らの氣質を證明する最も著明なる事實は約翰傳中に記されたる其弟子等の足を洗ひたまひしこと及び之に伴ふ訓誡「我は

主又先生なるに尙爾曹の足を洗ひたれば爾曹も相互に足を洗ふべきあり」約一三〇一四とある是なり。然れども此等の聖言の何れよりさへも勝りて人々を教訓する者あり即ち前の教訓を施したまへる後、我平和を爾曹に遺し置く我の平和を爾曹に與ふ我爾曹に與ふるは世の與ふるが如きに非ず。爾曹心に憂ふるなかれ又懼るゝなかれ、我嘗て爾曹に語りて我は往きて復爾曹に來らんといひしことを爾曹聽けり。爾曹若我を愛しなば我の父に歸るを喜びしならん。そは父は我より大なればなり」約一四〇二七、二八と云へる聖語なりとす。又之を少しく其後に捧げ給へる祈禱の語「父よ世の始の先に我爾と共に有らし所の榮光を以て今爾と共に我を崇めさせたまへ」約一七〇五に比較するときは特に其教訓的なること明なりとす。基督の地上に於る全生涯は人々に幸福を與へん爲に自ら自制と謙遜とを守りたまへるものなりき。蓋し彼が語りたまひし天に在す父が己より勝りたまへることは恐くば狀態

ゲッセマ
子及びカ
ルバリに
於て特に
然ること

の差異即ち基督が人々を救はんために之に離れ且其犠牲的事業を完
成したまひし後之に還らんとしたまふ状態の差異なりしあらん。
然り而して基督の献身的事業は其十字架上の死によりて完うせられ
たり蓋し之よりも深き謙遜は罪惡あるに非ざればなすこと能はざる
ものにして之よりも恐るべき苦痛は未だ嘗て忍耐せしめられたるも
のあらざりき是吾人が主の聖語より之を推察し得る所なり蓋し預め
十字架の苦痛を觀察したまひしのみにて我に沈められんとする沈
あり而して其成遂げらるゝまでは我責らるゝと幾何ぞや路一二〇五
十「今我魂憂痛めり我何をか言はん父よ我を救ひて此時より免れさせ
たまへといはんかされど我此時に至るは此事の爲なり」約一二〇二七
どのたまへばなり其後又ゲッセマ子の園に於て我魂痛く憂ひて死ぬ
る程なりといひ遂に少しく進み祈りて我父よ若得べくんば此杯を我
より離れしめ給へ然れども我心のまゝに非ず只御旨のまゝになし給

其謙遜
苦は必要
なれども
自好れ
忍びたま
ひしこと

へ「太二六三八、三九」どのたまへり吾人が耶穌の目的と其忍耐力とに關
して知り得る所の光明の下に照して之を考ふれば此等の言語の人心
を感動することは永久朽つる時なきなり彼の十字架を覆へる暗黒を
透徹して我神我神何ぞ我を棄てたまふや「太二七〇四六」と叫びたまひ
たる一言の外右の諸聖言より勝りて悲痛なるものはあらざるなり蓋
し吾人は明に知ること能はざれども神の方面より之を見れば凡て此
謙遜と苦痛とは迷へる者を救ひたまふに缺くべからざるものなりし
なり而して吾人が今此に論究せんと欲する事は其謙遜苦痛は皆主が
甘んじて之を忍びたまひしこと是あり此等の苦痛は自ら撰みて歩ま
んとしたまふ徑路に横はれり即ち之を歩まば必ず苦痛に遭遇すべき
ことを預め知りたまひしなり如何とあれば自らなしたまひし證據に
よれば人の子は己の生命を棄て、多くの人を贖はん爲に來れり」と又
更に譬を設けて我は天より降りし活ける麴包なり此麴包を食ふ者は

限なく活きん我世の生命の爲に與ふる麴包は我肉なりとのまひたればなり。耶穌が此世の人々の生命の爲に其肉を與へんと語りたまひしときに既にエルサレムに於て死の痛苦が己を待てることを考へたまへることを確信するには此引照を含有する議論に於ける次の數節、此に於てユダヤ人互に争ひていひけるは此人如何で其肉を我儕に與へて食はしむることを得んや、耶穌曰ひけるは我誠に誠に爾曹に告げん爾曹若人の子の肉を食はず又其血を飲まざれば爾曹自己の中に生命を有たず、我肉を食ひ我血を飲む者は無限生命あり終の日に我之を甦らせん、そは我肉は誠の食物なり我血は誠の飲物なればあり、我肉を食ひ我血を飲む者は我に居り我も亦彼に居る、活る父我を遺したまひ我父に由て活るが如く我を食ふ者も我に由て活きん、是天より降りし麴包なり先祖等が食ひ且死にしが如きに非ず此麴包を食ふものは限なく活きん〔約六〇五二―五八〕を讀まば十分なるべし

耶穌又己を他人より區別して善羊牧者なりとし且預言的聖語「我は善牧羊者なり善牧羊者は羊のために其生命を棄つ」〔約十〇一一〕を附加し又左の語「我再び生命を得んとて我生命を棄つる故に父は我を愛したまふ、何人も我より之を取奪ふに非ず我自ら之を棄つるなり」〔約十〇一七、一八〕を添加し給へり、而して自ら其身を捧げたまひし行爲の實際上必要なるとは猶他の聖語中に「若一粒の麥地に落ちて死なずんば唯一にて遣らん、若死なば多くの果を結ばん」〔約一二〇二四〕又「我地より擧げられなば萬民を己に引寄せん」〔約一二〇三二〕と斷言したまへり、抑も「我地より擧げられなば」どのたまへる句は悉くば主の預じめ期したまひし復活及び其昇天して力の右に擧げらる給ふべきことを指すも可なるべけれども吾人は之に付き約翰の解釋即ち「彼が斯曰ひしは其如何ある様にて死あんとするかを示し給へるあり」〔約翰一二〇三三〕を疑ふの理由を有せざるあり、何とされば此解釋は其前後の文に適へばなり、凡

そ基督の此等の聖言は自ら甘んじて痛苦を受けたまひしこと及び罪
と死とより人々を救ふの目的を以て之をなしたまへることを證明す
るなり

然り而して此等の聖言は基督の死が如何にして人々を其迷へる状態
より救ふかを説明せず、亦救済の計畫に關する哲理をも示さざるなり、
但し贖ひといへる語は實に代價を以て買取れる救済の觀念を想起せ
しむるなり、而して耶穌の、たまひし代價は耶穌自己の生命なりき、然
れども此譬諭は解明を與へられざるを以て理論の堅固なる基礎とし
て之を用ゐ難きなり、即ち是たゞ暗指にして其精細ある意義を示す爲
の開發説明を要するものなり、事實の陳述としては明ありといへども
理論の基礎としては完全ならざるなり、彼祈禱を捧げんとて神殿に登
りしパリサイ宗の人と税吏との譬諭中に用ゐたまひし聖言について
も之と同一の意見を持ち得べし、何とあれば税吏は神よ罪人なる我を

贖ひと織
たまひし
こと

其死は引
力ありて
必用なれ
ば明らさ
るること

憐み(挽回)たまへ(路一八〇一三)と祈りしに耶穌は此人はパリサイ宗の
人よりは義と爲られて家に歸れり(路一八〇一四)と公言したまへばあ
り、此聖言は實にパウロが羅馬及び加拉太人に送りし書中に教へたり
と見ゆるものと同一にして神の赦罪と其嘉納との理論を想起せしむ
るといへども只頗る其理論を想起せしむるに過ぎず換言すれば此理論
を擴充若くは開發せざるあり。

約一二〇三二にいへる基督の死より生ずる一種の引力は明に事實あ
りとして斷言せられ又同章中に若死なすんば其地上の生涯は無益な
ることを確言せられたりといへども一言すらも此驚くべき事實を説
明せんが爲に之を發せられざるあり、即ち所謂此引力は基督の道德の
確證たることに關し若くは神に對しては其最上の愛、人々に對しては
其單純なる犠牲、神聖なる律法に對しては其親密なる關係の證據たる
ことに關しては一言も述ぶる所なきなり、猶又我肉を食はず我血を飲

まされば爾曹の中に生命を有たずとのたまひたる譬諭的言辭は彼を以て死にたまふべき教主なりと信するの必要なることを明に指示すといへども、其事實を超越して吾人を導き其道德上の理由を知るに至らしむる能はざるなり、神に命せられし者にして飲くべからざる事實の外は如何なる説明をも與へ給ふべき時期は未だ到達せざりしなり、若此事實が説明せらるべきものなりせば吾人の考定し得る限によれば斯る説明は其死の痛苦を受け給ふ前に基督自己の言語によらずして聖氣の指導的感化を受けたる使徒等の言語により與へらるべきものなりとす

其事業の
光明を與
ふること

基督は宗教的眞理の教師として卓越なるものありしことは既に之を論せり、多くの聖言は主自ら十分に此事實を知り且其全体の事業を以て人々に對する神の啓示なりと考へたまひしことを證明するなり、第四福音によれば、我は世の光なり〔約八〇一二〕とのたまへり、換言すれば人

間世界の光明なりといふ義なり、而して「我は道なり」又「眞理あり生命なり」〔約一四〇六〕と曰へり、換言すれば人間に對する神聖なる眞理の身位的實體と根源となりたまへる義なり、我を見しものは父を見しなり〔約一四〇九〕換言すれば吾言行は神の意志の完全なる表示なりといふ義なり、我は父に居り父は我に居りたまふことを信せざるか〔約一四〇十〕換言すれば吾行爲の何たるに係らず皆父の行爲より分つべからざるものなりといふ義なり、此に由て之を見れば其全体の事業が人間に對する神の心意の現示なりと信じたまひしことより明なるものはあらざるなり、其教訓は悉く光明なるものにして隨て亦光明を與ふるものなり、罪惡の暗黒の外其勢力に抵抗し得るものあらざるなり。

第一の福音書中に「父の外に誰も子を知る者なし又子及び子の示さんと欲する所の者の外に父を知るものなし」とのたまひて以て大抵前節と同一の要求を斷言したまへることを記せり、此節に「知る」と譯せられ

神の旨を
啓示した
まふこと

たるギリツキ語は意味深き語にして十分に詳細なる知識を有するの義なり、斯く神を熟知することは人の子或は彼が此知識を與へんと欲する人々の外何人にも之を得ることを許されざるなり。是勿論萬民が幾何か神に関する知識を有する事實と全く相符合するなり。始の三福音書は相共に一致して「天地は失せんされど我言は失せじ」(太二四〇三五可一三〇三一路二一〇三三)とのたまへることを記せり、而して「我言」なる語は當時エルサレムの滅亡或は世の末について語りたまひしことを指し得べきも吾人は之を以て凡て其教訓に適用すべきものなることを信するに躊躇せざるなり。

基督が人間に關しておしたまひし教訓は其神に關してなしたまひし教訓の如く本元的にして完全なるものなりき、如何となれば彼は何れの時世何れの國民に對しても凡の点に於て理想的人物にして人間たるものは天賦の才量に於ては足らざる所あるにもせよ氣質と行爲と

理想的人
物を示し
たまふこ

に於ては正に之に則るべきものあることを證したまへばなり、其自ら占めたまひし位置或は他人より推任せられたまひし位置に於ては常に眞實の人間の如く働作したまへり即ち彼は聖明にして寛恕、剛毅にして勇氣ある者なると同時に柔和にして同情あるものなりき、彼は決して譽れども傲らず辱しむれども撓まず喝せども恐れず強ふるれども服したまはざりき、吾人が其生涯を研究するときユダヤ人の狹隘にして排他的なる、ギリシヤ人の奇を好んで輕躁なる、ローマ人の貪名にして權勢を希ふ氣質の蹤跡ども彼の中に發見する能はざるなり、而して發見する所の彼の模範的人物にして前見寛大博愛且自ら利を求むるの心なきとなりき、此等の諸徳に由て彼は人たる者の正に斯くあるべき本領を教へ且日常の生活と事業とに属する言語を以て神と和ぐ状態に要する吾人の性質の理想を與へたまへり

然り而して一異論の吾人の眼界に現するあり、抑も耶穌基督は如何に

人の子に
して亦神に
こゝなる

して同時に同一の行によりて神たり又人たることを表すことを得給ひしか。豈に人にして其言は神聖あるか、抑も亦神にして其行は人間なるか。此疑問に答ふるに最良ある者は舊約書中の「神其像の如くに人を創造りたまへり」なる句中に含有せられたり、而して其像とは身体上を指すよりも道徳上を指せるものなり、此故に理想上の「人の子」は眞正ある神の子なりき。蓋し心を盡して神を愛し得る爲に人たる者が必老全能或は全知なる者とあるの要なきなり道徳上の善良と稱すべきものは必ずしも最大なる者に於てのみ之を試み又は之を現すことを得るにあらず最小あるものに於ても之を試み之を現すことを得るあり、亦成人の氣質に於て現はるゝものは、小兒の氣質に於ても現るゝなり、國家を設立し或は世界を平定するときに於けるも冷かなる一杯の水を與ふる時に於けるも之を試みることを得べきなり。純潔信實及び仁愛は神に属する徳なれども亦人の徳たることを得べし、而して實に耶

蘇基督の生涯は人々若神に對する和平を回復するときは同一の人に於て道義上の行爲に於て常に神と人とを表すことを得べき道を吾人に示すものなり。今此に既に論じたる人々の現在の道徳上の状態に關する基督の教訓を反復し又は人々の聖き生涯に入る方法及び其生涯に於ける進歩に關して後章に論せんとすることを預じめ述ぶるの要あり、吾人の現今の希望は讀者をして基督の事業の全体は己の性質を現したまふものにして彼にとりては此己を現すことは神と人とを現すものなることを悟らしめんとするにあり。詳言すれば神は性質的に於て如何なるものなるか、又人は罪の束縛より免るゝときは如何なるものなるかを知らしめんとするにあり。右の意味に於て基督の全事業は人心に光明を與ふるものにして、彼が來りて設立したまひし政治は只愛によりてのみ支配せらるゝ、眞理の政治なりしことを知るあり

地上に於ける基督の傳道事業の最も高尚なる目的は人々の精氣上の改良ありき、是事たる最も明に第四福音書中に見ゆたり、例へばニコデモに語りたまへる聖言の精氣的生命を得るには新生の必要なることを示し(約三〇五)又サマリヤの女と語りたまひし語中にも同一なる變化を示したまへり(約四〇一四、二一―二四)第五章に於ては之に關して「それは父の死人を甦らせて之を活したまふが如く子も其欲する所の者を活せばなり」といひ第六章に於ては彼の疑團を懐けるユダヤ人に向て「活す者は氣なり肉は益なきものあり我爾曹にいひし言は氣あり生命なり」(約六〇六三)と告げたまひし著しき談話を存せり「人若其旨に従はば此教は神よりなるか或は我已よりいへるなるかを知らん」(約七〇一七)といへる聖言中にも同一なる事實を意味したまへり、而して耶穌は主張して吾が教訓は心の正しき人即ち神の意志をなさんと欲するものは其教訓の神聖なることを承認するが如き斯る性質のものなりと

のたまへり、而して是只ニコデモに語りたまひし聖語「人は水と聖氣とに由て生れずんば神の御國に入るに能はじ」の積極的形式なる而已、神の兒輩の外何人も神を知り又は之に従ふ能はざるなり、又我を見る者は我を遣したまひし者を見るなり、我は凡て我を信する者の暗黒に居ざる爲に光として世に來れり(約一二〇四五、四六)と勿論此暗黒とは此には特に罪より生じたるものにして基督に於ける信仰とは罪を離れ神の旨をなすの覺悟を含有するなり、凡そ右の數句は第四福音書全體の趣旨を代表する者なり、何とあれば此福音によれば基督は精氣的結果を目的とし給へばなり、而して凡て他の事柄は第二に屬する事なりとす、健康、富貴、名譽は主の理想に於る真正なる生涯に對しては下等ある位置に置かれたり、基督の思想に於ては神及び耶穌基督を知るとは人たるもの、生命の最も深き實質ありき(約一七〇三)基督は健全學、經濟學、政治學を教へて人を救はんとために此世に來りたまはず唯悔改

と信仰とを救へて人を救はんために來りたまへり、此二者には凡の他物を附加せらるゝことは得べけれど此等の物は決して人間幸福の心髓實體にあらずして只附屬物なるのみ

右は初
三福音書
に於て
とられし
こと

基督の事業の道德上の目的に關する其教訓は初の三福音書中にあるものと第四福音書中にあるものと少しも相異なることなし、馬太傳によればマリヤの子を生まんとするとき主の使來りて其名を耶穌と稱ふべしと其夫なるヨセフに命じたまへり則ち如何となれば彼己の民を罪より救ひたまふべければなりといへり而して此句は人々を罪の罰及び其支配より救ふことを意味すと信するの理由あるなり、されど罪の支配は只新なる宗教的生涯に入ることによりてのみ之を脱するを得べし、之と同一なる思想は「悔改めよ天の政治は近きにあり」とのたまへる宣傳中に含有せられたり、且又一層強き語氣を以て山上の垂訓中に之を發言したまへり何となれば此大なる垂訓は神の王國に属す

るものは心の謙遜るもの、氣に乏しきことあるを認むる者、心の深きもの、柔和なるもの、憐みあるもの、和睦を求むる者、義を慕ふもの、義の爲に責めらるゝものなることを示せばなり

富める者、樂しむ者、暴き者、飽ける者、狡猾なる者、戦を好む者、王侯の嬖人等は其然る者たるの故を以て天の王國に於ては著しき位置を有せず、之に反して貧しき者、悲しむ者、柔和なる者、飢ゑたる者、質樸なる者、平和を好む者、迫害されたる者即ち基督の爲に凡て之を耐へ忍び又此世の慰めを望むよりは寧ろ精氣的の慰めを望むものは天國に於て著しき位置を得べし

アレキサンダー

抑も山上の垂訓は第一福音書中に保存されたる者にして神の王國の性質及び其律法に關する唯一の概論なることは思考すべきことなりとす、故に其垂訓は主の傳道事業の大部分なる市邑村落に於る其説教の標準を具ふる者と見做し得べきなり、而して其中の若干句は路加傳

亦山上の
垂訓に於
ては

中に他の句と結合して記せられたり。垂訓中の神、道徳、祈禱、赦罪、宗教的
依頼、及び精氣的生涯に關する意見は悔改に關する勸話と共に當時の
人々が之を聞くを好まざるに至るまで之を反復し、而る後譬諭を以て
語り、又屢其弟子等に其意味を説明したまへり(太一三〇十一—三六可四
〇二—三四路八〇十)。エルサレムの滅亡及び世の末に關する稍廣き教
訓は其磔死に先だつ二日に於て恐くば只一回其弟子等に述べたまひ
しのみあらん(太二四〇二五〇可一三〇路二一〇)此故に此教訓は人々
に宣傳し給ひたる普通の説教を代表するものと思ふべからず、此説教
の目的は人々を新なる精氣的生涯に導き行爲の根源を清め以て其行
爲其物を清め品行の敬虔にして仁愛たらんが爲に愛、樂、平和を以て人
心に充たすにありしなり

第六章 基督の王國に關する其教訓

其事業は
制御的な
ること

若基督の地上に於る事業を以て失敗せるものなりしと思惟するもの
あらば之より大なる謬見は未だ會て之れあらざるなり、其事業は始よ
り終に至るまで神聖なる成功を得たる者にして此世に於る空前最大
ある者なりしなり、抑も耶穌基督は其傳道事業の日に當りて人心を制
御する一種の感化力にして、其力たる時世の経過と共に増大して確に
際限なく擴充する特質を有する者なりき、そは其感化力は人間生命の
根源まで洞達すればなり、即ち生命の泉源に入り、其見ゆる勢力によ
りて人々の品性を陶冶するなり、基督は自ら其權威につき又は人間の
救拯の爲に之を用ゐたまふ能力あることにつき決して少しも疑を
含む言語を發したまはず、エルサレムを眺めて歎きたまひし時すらも自
己のため又は未來に於る其成功の爲には少しも失望したまはず其人
民が最大なる幸福を拒みて必然なる滅亡を招かんとする頑固なる罪
惡の爲に哀悼したまへり、吾人は既に基督が其死を以て人々の心を制

其王國

御して之を救ふ爲に缺く可らざるものと前見したまひしこと及び其死は最も深き耻辱の死なるべしと熟知したまひしことを見たり其賤しき誕生世に顯れざる生長短日月の傳道及び奴隸の如き磔死は古より人或は天使も未だ嘗て有したるとあらざる名譽と勢力とある位に登りたまひし階段なりき然れども其事業の制御力ある方面を示すには其王國に關する教訓の論究によること最も吾人に便利なる方法なるべし吾人が基督の王國といふ所以のものは假令基督は通常神の王國或は天の王國と宣まひしといへども亦人の子に關して其政治を以て來る〔太一六〇二八〕其使等を遣して其王國の中より……罪を犯すものどもを集め〔太一三〇四一〕どのたまひ又太二五〇三四四十に於て人の子を世の終末の審判に於る王と稱へ且つピラトに證して我王國は此世に屬せず〔約一八〇三六〕どのたまひたるを以てあり而して吾人が既に引照したる聖言例之は

其王國に
よるは彼
に入らる

天の中地の上の凡の權は我に賜はれり父は誰をも審判かず凡の審判を子に任せたまへり子を敬はざるものは之を遣したまひし父を敬はざるなり人若し我を愛せば我言を守らん我父は彼を愛したまはん又我儕は彼に至り彼と共に住まんを記憶せば耶穌が神の國を以て亦己の國と認め又少しも不相應なることなく若く稱ふることを得たまひしことは甚だ明瞭なりとす吾人は今基督の王國に入ることに關して其教訓を考究せんとす彼は其王國に入る人々に對して己の個人的關係を語りたまへり即ち路可の記したる福音中に我來りしは義き者を招く爲にわらず唯罪あるものを招きて悔改めさせん爲あり〔五〇三二〕又その人の子は失せたる者を尋ねて救はん爲に來ればあり〔一九〇十〕といへる基督の證明より考究を始むるときは此問題に關する他の凡の難問を解釋する鍵輪を得べし右と同一なる思想は明に失ひたる羊〔又失ひたる銀〕路一五〇二―

十の譬諭に現はれ「放蕩息子」路一五〇一一—三二の譬諭は更に明に之を示せり此等の教訓は直接に彼の神の前に著しく罪あるものと認められ彼の通常自ら正義ありと託言するものと遙に異なりし罪人や税吏を指示して之を與へたまひしものあることは儘に眞實なり然れども決して耶穌は税吏や罪人と同じく學者とパリサイ宗の人とは迷ひたる者にあらずと許したまひしと思惟すべからず何となれば他の時機に於て彼等に向て語りたまへる語氣は其偽善と頑固なる心とを惡み給ひし大なる憤慨を示せばなり抑も彼等は倍して迷へる者なり何となれば彼等は實に傲慢利己壓制にして其氣に於て神より遠き者なるにも係らず彼等自らは安全に其天の家に宿り得たりと想像したればあり耶穌は實に其傳道事業の初に當りて學者中の一人にして恐くば其中の最も善良なるものなるニコデモに向ひて人は新に生れずんば神の御國を見ること能はじと斷言したまへり

又彼が教へたまひし眞理に
よるこゝに

耶穌は種蒔の譬諭を説明して蒔かれし種は「御政治の言」なりとのたまへり(太一三〇一九之と相似たる麥と草稗との譬諭を説明して「美き種を蒔くものは人の子あり」太一三〇三七)とのたまへり此等の説明によれば吾人は耶穌が其宣傳を以て人々を其王國に導き生活と義務との新なる秩序に入らしむる方法と認めたまひしとを決定するなり前の譬諭によりて吾人は亦基督は其道德上の如何に係らず之を聽聞せんとする凡ての人々に其王國の言辭を宣傳したまひしことを推察し後の譬諭によりて右と同一の眞理を學ぶ何とあれば「國は此世界なり」換言すれば人間の世界なりとのたまひたればあり而して基督が時として「凡て勞動する者重を負ふ者よ我に來れ我爾曹を息ません」(太一一〇二八)の如き意味を以て或る特別なる道德上の状態にある人々に宣傳したまひし事實は之を以て福音の招きは只預じめ其招きに應ずべき境遇にある僅の人々に限られたるものと了解すべからず反て寧ろ

其招きは斯の如きもの、至急の必用に適することを確認し或は大抵斯るもの、み實に其招きを甘受すべきものなることを意味すと了解すべきなり。何となれば此大教師は人々に福音を授くるに當りて其無益たるべき時機あることを知り又既に招きを拒みたるものに之を反復するは賢者の事にあらざるの時機あるを知りたまへるは確實なることなればなり。太十〇一四、一五、二三〇三七、三八。然れども耶穌は天の恩恵の音信を以て萬民の爲に備へられたるものと認め且其弟子等に「爾曹往きて萬國の人々を弟子とせよ」太二八〇一九と命じ給へることも眞實あることなり。是其事業にして其幾分は地上に居たまふ間に自ら之を成し昇天の後には世にある其弟子等及び代表者をして其餘を繼がしめたまふなり。上に引照したる諸句に「ピット」に語りたまへるもの即ち「爾のいへるが如し我は王なり我生れて世に來りしは眞理に付て證せん爲なり凡て眞理よりの者は我聲を聴く」約一八〇三七を加ふ

又聖氣の
感化力に
よること

ることを得べし。眞理は依て以て君が敵を征服して勝利を得たまふ鉄鎗なりき。眞理は依て以て君が最も暗黒なる偏頗を驅逐し給ふ光明なりき。又眞理は依て以て君が人々を引きよて己の朋友とし従者としたまふ遊石なりき。然れども人々の魂は單に此力の働きのみにては基督に吸引せられずして此力を助くる彼の見ゆるものにして剛強なる補助者即ち聖氣の存するありき。是基督の性質が神にして亦人ありしが故に従て幾何か人間の狀態に属する試練と補助とを受けたまふべきのみならず猶又彼は人間の爲に働きたまふを以て神の光明を歓迎し神の意志に服従する爲に預め人々の心意を準備するは聖氣の特有ある働きありしを以てあり。右の方法を以て彼は常に只獨り居り給ふにあらずして父と聖氣とに相結び相交りて其王國に人々を導かんとて之に接したまへり。

吸引せら
れしもの
少きこと

耶穌の如く其父を知り耶穌の如く人々の心を知り且生命の道を知りたまひしものは其目的は神聖にして其愛は完全に其同情は柔和にして其態度は温厚に其口舌は能辨にして生ける言語を以て真理に被らし犯すべからざる權威を以て之を發表し其實質も其方法も之を聞くものゝ必要に應じ、山上にも海濱にも或は會堂に神殿に井側には竈爐の邊道路の傍にも之を聞かんと欲する凡の者に教を施したまひ己を惜むことなく夜を以て日に繼ぎ其終りに至るまで勞作したまへるものにして彼の如く奇蹟と神氣とに助けられたる斯る傳道事業にしてイスマエル人の若く僅々たる人々をして狭き門より生命の道に入らしめたまひしは豈に怪しむべきことに非ずや嗚呼偏頗傲慢頑固の抵抗の屢征服しがたきことは誠に歎すべきかな

王國に入
るしもの
行爲

耶穌は屢人々が其王國に入らんとする爲に爲さる可らざる事を語りたまへり此事に關して人々のなすべき行爲を示すに用ゐたまひし

言語は大抵譬諭的なれど悟り得べきものなり又其中の若干は讀んで字の如くなりき譬諭的に歸すべきものは左の如き種類なり

我に來れ爾曹我軛を負へ太一一〇二八、二九 勵みて窄き門より入るやうにせよ(路一三〇二四) 戸を叩け然ば爾曹に開れん(太七〇七) 天に財を蓄ふべし(大六〇二十) 爾往きて有てるものを悉く賣り賣しき者に施せ然ば爾は天に於て財を有たん(可十〇二二) 我與ふる所の水を飲むものは何時までも渴くことなけん(約四〇一四) 神の言を聽きて之を行ふ者は是我母我兄弟なり(路八〇二二) 我肉を食ひ我血を飲む者は無限生命あり(約六〇五四)

此問題に關する基督の教訓の文字の如くに解釋すべきものは左の如し

悔改めよ天の政治は近きにあり(太四〇一七) 其道しゝ所の者を信するは是神の事業を行ふ事なり(約六〇二九) 人若し其旨に従はば此教

悔改ま信
仰

は神よりあるか或は我已よりいへるなるかを知らん(約七〇一七) 悔改むること、基督を信すること、神の旨をなさんと欲すること、此等は人々が救済を得ん爲に必ずなすべき事を示せる文字通りの陳述なり。所謂る悔改むるとは神と己の生涯とに關する己の意見目的を變更し己の過去の道を顧みて之を棄て、嚴肅の心を以て甘んじて神の旨に従はんと欲する新しき進路を取ると是なり。所謂る基督を信するとは罪と死とよりの救主、特に其十字架上の犠牲に由て吾人を贖ひたまふ救主として彼に依頼することは是あり。罪ある者が基督に對して斯る行爲と態度とをあすべきは第四福音書中に強き語氣を以て示され、殆んど恰も是神に嘉納せらるゝ惟一の條件にして限りなき生命を得る十分なる抵當なるが如し。所謂る神の旨をなさんと欲すとは神の權威を承諾すると同意にして異語なる而已而して此承諾たる疑ひもなく基督を信することの内に含有せらるゝなり

基督の政治は精氣的に個人化する

右の引照は基督の政治は精氣的にして其誠實なる從臣たらんとするには自ら好んで罪を離れ必ず基督を以て彼等の王及び救主なりと承認すべきことを示す。此行爲たる父母又は主長たるもの之に代りて爲すこと能はざるなり。アブラハムの子孫たるのゆゑを以て悔改の代用となすべからず。普通の禮儀に習へる故を以て神の寵幸を得るの免狀となすべからず。長き祈禱と外見を飾る施與とは其心を清むる能はず亦神に對して其利己を隠す能はず。然して罪を悲しみ、義を慕ひ、基督に依頼するは其王國に入るを得る條件にして永久の生命の始なり。彼の放蕩息子の譬諭に彼の息子は遂に本心に立還りて「我起て父に往きて言はん父よ我天に背き且爾の前に罪を犯せり既や爾の息子と稱へらるゝに足らず只我を以て傭人の一人の如くに爲し給へ」(路一五〇一八、一九)といへりと記されたり。彼の放蕩息子は第一に本心に立還れり、内部の變化は外部に先立てり、彼の精氣の眼は開きて其痛むべき痴愚と

罪惡を目標し、悔改の心を以て前に輕蔑して殆ど心に留まらざりし己の本家を求めたり

王國に對する幼子の關係

論じて此に至り或は幼子等は天の王國に属せざるかとの疑問を尋ぬる者あるべし、而して此にいふ幼子とは未だ自ら罪を犯し或は神に對する知識を有するに至らざるものを意味す、又基督自ら天の王國は彼等の有なりと教へたまふにあらずや(太一九〇一三一―一五可十〇一三一―一六路一八〇一五―一七參照太一八〇一―一五可九〇三三一―三七路九〇四六―四八)といふものあらん蓋し福音記者等は此疑問の如く其語を記録せずして彼等は一致して左の如くのたまへりと證明せり「天の政治に属する者は斯の如きものなればなり」即ち斯の如きものとは幼子の如きものを指すあり、但し若此聖語が其弟子等に某の要用ありとせば幼子の如きとは其年齢知識或は無我なることを指すにあらずして馬可傳の前後の言が示す如く擧る其單純と孝順とを指すと確認

することを得るなり、比較に便ならしめん爲に引照したる終の三句中には幼子を弟子等の中に置き且我誠に爾曹に告げん爾曹改めて幼子の如くなるに非ずんば天の御國に入ることを得じといひたまひて以て弟子等の名譽心を戒めたまへり然して吾人は此等の引照中に幼子は道徳上の改良若くは自覺的信仰なきも救はるべしとの絶對的教訓を見出すこと能はざれども未來の審判に關する救主の聖語の人々が道徳上の行爲の理由によりて或は許され或は罪せらるゝことを示し且幼稚にして死ぬるものは救はるべしとの信仰を保證するに足るものありと信す、然れども幼子が此世にあるの間「人若新に生れずんば神の御國を見ること能はじ」のたまへる律法より例外なるものありといふべき何等の理由をも有せざるなり

第七章 基督の王國の律法に關する其教訓

其王國に於る生活の律法

基督の教訓中に於て其倫理上の特質より明瞭なるものはなく且思慮深遠ある人々の尊敬を起すこと之に過ぎたる者あらざるなり。然らば道徳上の法則に關する基督の思想如何又其王國に於ける方正なる行爲に關する基督の思想は如何是吾人の當に研究すべき問題たるあり而して基督の教へたまへる律法全体の要領凡の信者の熟知する所なる爾心を盡して爾の神たる主を愛すべし又己の如く隣の人を愛すべし凡の律法は此二つの命令によるなり(太二二〇三七—四十)是なり。是或の愛は方正なる行爲に關する惟一の道義上の資格あるか或は愛は方正なる行爲を成立せしむる要件にして且主要なる資格の一なるか二者何れをか示すことを得べし。前説に従へば神が愛を命じたまふことは直接に道徳上の行爲を命じたまふに同じく、後説に従へば神が愛

神に對する愛の律法に於て此命令に

を命じたまふことは直接にも間接にも方正なる行爲を命じたまふに同じ、何とあれば之を有するとき人は人をして方正なる行爲を知らしめ且之を行はしめ且之を缺くときは人をして凡の邪惡なる行爲をなさしむることを命ずるに同じければなり。而して吾人は後説を以て更に好しとするなり。律法に關する救主の解剖は、第一、吾人を導きて神に對する愛を以て其王國に於ける生命の一部ありと思惟せしむるなり。此愛の最上ある者あるべし即ち心を盡し魂を盡し意を盡し力を盡すべきものなるべし、換言すれば其愛たる氣魂の及ぶ限り敬虔純粹にして熱心なるべし。斯る愛は人をして神に對する敬虔に富ましめ神は聖きものあることを感せしめ、凡の人に聖きものと尊敬されたまはんことを望ましめ又常に人をして其御名を崇めさせたまへと祈らしむべし。此愛は襄すことを憎みて凡の名に勝る名に不敬の言語容貌態度をなすことを避けしめ或は神に付て語るとき或は心を開きて神の前に祈

るとき饒舌多言を避け畏敬を以て永久の寶位の前に禮拜讚美せしむ
されど亦恐懼に沈むことあからしむ何となれば愛は恐懼を除けばな
り斯る愛は人をして十分に神の注意攝理に依頼し明日の危険と必需
即ち衣食住とを憂ふることなからしめ空の鳥野の草谷の百合及び神
が如何にして之を養ひたまふかを記憶せしめ且父ある神が其子等を
養ひたまふことを忘れしめざるなり猶又斯る愛は人をして神に對し
て從順の氣に充たしめ且人の子の如く神を喜ばすべき凡の事をあす
に熱心ならしむべし又斯る愛は忠實なる家宰たること即ち主の爲に
最良なる方法を以て凡の才能所有物及び機會を利用することを保證
すべし其主人を愛せざりしものは不忠なる家宰にして主よ我爾は嚴
しき人あるを知る〔太二五〇二四〕といへり之に反して忠義なる家宰は
一般に其主人を愛するものと見做されたり而して遂に神に對する最
上なる愛は吾人が此世にありて修練の爲に定められたる患難痛苦の

人に對す
る愛を要
すること

基督信者
に對する
特別なる
愛

中に隠れたる智慧と恩恵とを發見し生命に導く所の門は窄く其路も
狭しと囁くことなく假令ラザロの如く其膳より落つる物にて養はれ
んことを欲せり尙又犬等來りて其腫物を舐めたり〔路一六〇二二〕とも
其愛する救主の智慧に依頼すべし。

第二、人に對する愛は基督の王國に於ける生命若くは行爲の神聖なる
律法の一部なり己の如く隣の人を愛すべし而して其隣の人とは其助
け得べき範圍内にある人類を意味す然れども基督の教訓は精密に一
様にして同一の程度なる愛情を以て凡の人々を愛せよと其從臣に命
じたまふにあらず約翰傳によれば十二人の内に耶穌の愛したまひし
一人ありき〔一三〇二三、一九〇二六、二十〇二、二一〇七、二十〕換言すれば
是特別なる愛を以て愛し給ひしものなり耶穌は又マルタと其妹及び
ラザロを愛し給ひしなりと記されたり又道の側より走り出で、跪き
「先生よ我限なき生命を嗣がんとて何を爲すべきか〔可十〇一七、二一〕と

問ひたる富める少年を愛し給へりといへるは吾人の殆ど怪しみ驚く
所なり此等の句の惟一にして明瞭なる意味は耶穌の或者に對する愛
は他の者に對する愛より程度性質に於て區別せらるべきものなりし
ことを示せり耶穌が附されたまひし前の夜十一人に「我爾曹互に相愛
すべしとの新しき命令を爾曹に授く、恰も我爾曹を愛する如く爾曹も
互に相愛すべし、爾曹若互に相愛しなば是に由て人々皆爾曹は我弟子
なることを知らん」(約一三〇三四三五)とのたまひしは恰も彼等の交互
の愛は其程度に於て他の人間に對する愛に異なるべきが如く、彼等に
對する基督の愛は或る意味に於て一般の人々に對する愛と相異なる
ことを想起せしむ。然り而して耶穌は其王國の道德上の律法中に肉體
に係る親戚或は精氣的近親の連鎖を以て吾人に結合する者に對して
は特別なる愛を命じたまふと同時に驚くべき語勢を以て人間として
人々を愛すべきの義務を命じたまへり、耶穌の患難にあるものを助け

仇に對する愛を要する

損害を免すを要する

得る凡の人を指して其隣人なりといひ且患難にある人に其要用なる
補助を與ふることによりて其隣人たることを示すものありとのたま
へり(路十〇三十)否寧ろ彼の患難にある異邦人即ち假令彼の惱める外
人は其心に於ける敵なるか將た少くも交義なき種族に属するもの
なりども之を援くべきことを示さんが爲に此譬諭を設けたまへり、外人
なれども人なり敵なれども同類なり、基督の愛の律法は之に對して善
をなし惡をさすなかれと命するなり、基督の王國に於る生命の律法は
遙に之に勝りて進歩せるものなり、山上の垂訓は最も平易なる言語を
以て精氣的生命の法則として仇を愛すべきことを命せり即ち「爾曹爾
の隣を愛し、爾の仇を恨むべし」と云れしとあるを聞けり、されど我爾
曹に告げん爾曹の仇人を愛しみ爾曹を責る者の爲に祈れ然ば爾曹は
天に在す爾曹の父の兒輩とならん(太五〇四三―四五)是あり、仇を愛す
ることに密接の關係あるものは損害を免すことなり是基督の嚴命し

たまへる義務なり路加傳によれば「若爾の兄弟罪を犯さば之を諫めよ
悔改めさば之を赦せ、若一日七次爾に對して罪を犯し七次爾に返りて
我悔ゆと言はば之を赦すべし」〔路一七〇三、四〕と其弟子等にのたまへり。
而して馬太傳によれば或時ペテロ基督に向ひて「主よ我兄弟我に背き
て罪を犯さば幾度之を赦すべきか七度までか」といひけるとき「我爾に
七度までと言はず七度を七十倍といふなり」〔一八〇二一、二二〕と曰給ひ
たる著しき聖語は之に次ぐに王の臣僕の譬諭を以てしたり、即ち彼の
臣僕は其王より一万タレント（銀ならば三千二百八十五万圓）を私に借
りて返すと能はざりしが此大なる負債を免されたる後道にて銀百デ
ナリ（凡そ三十四圓）を貸したる同僚に逢ひ此僅なる金子を調ふる爲の
延期を聽かずして返済し終るまで之を牢獄に投げ入れたり、〔一八〇二
三—三四〕而して之より學ぶべきことは左の如く之を赦へたまへり、若
し爾曹各心より兄弟を赦すに非ずんば我天の父も斯の如く爾曹にな

施與を要
するこゝ

したまはん〔一八〇三五〕と、損害を免すの義務は人間の言語を以て之よ
り嚴論痛言する能はざるなり、されど人々をして斯の如く損害を免さ
しむる愛は深厚にして純潔なるべきなり。
施與をなすことは吾人の目には之を受る人々に對して或は不良の結
果を來さざるか頗る疑はしき親切あれども神の前に施與を以て喜ば
しき義務たらしむる所の愛は亦深厚にして純潔あるべきなり、人に見
られん爲又人々に譽められんために施與をなすは不信實にして神の
前に惡むべきものなることは耶穌明に之を教へたまへり、施與は素よ
り慈惠なるべけれど亦常に人に對する愛の結果にして神に對する感
謝の表示なりとす、施與に對する道徳上の法則の關係を學ぶには山上
の垂訓中にある之に關する教訓に加ふる富人とラザロとの譬諭を以
てすべし、願て現今の社會の事情を觀察すれば精密に基督の傳道事業
の時代に於ける社會の狀態に等しからざることば必然の事なるが故

に施與の方法も或る關係に於て變化すべきことは考へ及び離きことにあらず吾人の見る所を以てすれば施與に關する最大にして確定惟一の法則は人に對して最も親切にして其人に要用なる方法を以て愛情を表す所の愛の法あり。

福音を萬民に宣傳する義務は人に對する愛の義務より流出すること明らかし、何となれば福音は實に幸福の音信にして惠を受けるに足らざるものに對しては惠の音信、奴隸たるものに對しては救の音信、迷ひたるものに對しては助の音信あり(路一三〇五約八〇三四路一九〇十)己の爲に此音信を受け且己の如く其隣人を愛するものは其隣人が同一なる音信を聽きて之を喜び受けんとを望まざらんと欲するも能はざる所なり、然して基督信者等が福音を宣傳するを得べき所の凡の人々は其關係上皆其隣人あり、又基督自ら大命令(太二八〇一九可一六〇一五)を發して福音は歲月の進むに従ひて信者によりて萬民に與へらる

福音を萬民に宣傳すべきこと

憎惡貪婪等を禁ずること

べしと示し給へり、故に信仰の行爲、愛の勞動、望の忍耐を以て宣傳をなすは信者たる者の心に充つる愛より生ずる其同胞に對する最上の勤務にして斯てこそ主の爲にもなし得べき最上の勤務なれ、愛の律法に従ふことは他の一面より之を見れば憎惡(太五〇四三、四四)憤怒(太五〇二二)争鬪(太五〇九、二四、二五)復讐(太五〇三九)淫欲(太五〇二八)貪婪(可一二〇)四十)壓制(太二三〇四)惟一の理由にあらざる離婚(太五〇三二、一九〇九)其外社會の生活秩序及び潔白を汚亂する凡の、欲情行爲と相容れざることを明なり、此故に少しも躊躇することなく耶穌基督の倫理的教訓は完全なるものなり、其從臣等の爲に與へたまへる社會的宗教的生活の律法は道德上行爲の全範圍を包含して凡の善を命じ凡の惡を禁ずるものなりといふを得べし。

第八章 基督の王國の秩序協同に關する其

教訓

其王國に於ける秩序及び協同

基督が己自らに付き及び其弟子等に付て語りたまふとき王國なる言を用ゐたまひしとは吾人をして直ちに秩序及び協同なる思想を惹き起さしむ、何となれば如何ある王國も上下の秩序と人民の協同となくして長く存在すると能はざればなり。此故に耶穌が屢其弟子を以つて神の王國にゐるものとして説話したまひたれば吾人は耶穌が亦彼等を以て權威の下にあり又相共に其權威の下に働くものと思惟したまひしと假定せざるべからず、或る時機に於ては己を以て彼等の王と稱へたまへど他の時機に於ては神を以て彼等の王なりとのたまへり。此等の聖言を除けば彼が其臣民に關する形式的組織を指示したまひしと甚だ稀なり。彼は相敬し相親しみ兄の如く弟の如く相愛し相助くることを命じたまふ、されど宗教政治或は其弟子の中に主長的階級を設

協同的禮拜を勤まふこと

立したまはざりき、然れども此問題に關して耶穌が教へたまひしと記録せらるゝ凡の事柄を學ぶは大切緊要の事なりとす。耶穌は協同して神を禮拜することを奨勵したまへり、例へば馬太傳によれば「爾曹の中二人地に於て何事にても心を合せて之を願はゞ天に在す我父は其者の爲に之をなしたまはん蓋二三人我名を以て集る處には我も其中に居ればあり」(一八〇一九二十)とのたまへり、恐くば是等の聖言が罪を犯せる兄弟に對して行ふべき秩序に關して「若教會に聽かずんば是を異邦人や税吏の如きものとすべし、我誠に爾曹に告げん何事にても爾曹が地に於て縛ることは天に於ても縛られん又地に於て解くことは天に於ても解かれん」(二八〇一七、一八)といへる言語を以て終りたる教訓に續くとは注意すべきことなりとす、祈禱にもせよ判斷にもせよ信者等の結合したる行爲が儘に承認せらるゝことは此數句の聖言によりて疑ひなく確實なりとす、此には此の引照の説明は之

共同的禮典を命じたまふこと

を以て十分とし詳細の説は之を後章に譲るべし

基督は其弟子等の爲に一の共同的禮典を設立したまへり、蓋し神聖なる記録の説く所によれば主の聖晚餐は即ち是なり、抑も聖晚餐は何れの弟子を問はず一人にて之を行ふべきものにあらざして其臣民を代表するに足る結合したる家族的團體若くは會衆の行ふべき意味深遠にして記念的なる晚餐なり、彼の踰越節の設立に關する歴史を見れば踰越の小羊の死に於る如く基督の死に於けるも一つの者の苦痛によりて多數の者が救はれしことを記憶し又要用ある真理を證明する爲に前表的禮式の價值を考へなば耶穌が此禮典を以て共同的の事としたまひ其弟子たちの之を守る爲に一定の法則に從ひたる會衆の集合せんことを望みたまひしこと明瞭なりとす。此事に關して吾人が有する凡の證據は此方向を指示し且吾人が達し得る限りに於て此證據の指導によりて進行するは安全の策なりとす

其臣民に教會なる語を應用したまへること

パプテスマなる禮典も聖晚餐に同じく其目的其意義兩つながら共同的のものたり、蓋し此禮典は明に基督に於ける信仰の公けなる告白にして彼の臣民と同胞となりて交義を結ぶ紹介の儀式たらんが爲に設立せられたり、而して救主に對する信仰を告白する此定法は吾人が學び得べき限りに於て常に信者たるもの、共同的生涯の第一着なりとす

(太三〇一五、二八〇一九約四〇一二)

基督は其弟子等の事に付き語りたまひしとき二度教會なる語を用ゐたまへり其一はペテロに爾はペテロあり我此巖の上に我教會を建てん陰府の門は之に勝つ事能はじ(太一六〇一八)どのたまへるとき其二は若し彼等にも聽かずんば教會に告げよ教會に聽かずんば是を異邦人や税吏の如き者とすべしとのたまひたるるとき是なり、此二句の引照の第二に於ける教會は信者たる者の交義を結び或は懲戒を行ふ時機に於て終極の權威を有する信者等の團體ありと思惟せらるゝより明

なることなし、されど第一に於ける教會なる語は彼のモーセ時代よりイスラエルの會衆或は集會なる語が大抵其人民全體を表すために用ゐられし如く思へば第二に於る教會ある語の意味より一層大なる範圍を以て基督信者全體を表すために用ゐられしならん(徒七〇三八參照然して教會ある語の用は右の如しとするも猶又公共の法則と主長との下に結合したる人々を意味するものとす。新約書中後部の記録に於て吾人は基督が其臣民の中に施行せんことを欲したまひし秩序と協同との性質に付き一層精密に發見する所あるべし。

基督は一度のみならず其是認したまひし基督信者等の主長の種類に付き説話したまへり、或る時ヨハ子とヤコブとの母其兩人の子等を伴ひて耶穌の下に來り、其王國に於て彼の下に最高なる二の位置を與へられんことを其子等の爲に求めたり、之を聞ける他の十人の使徒は自ら不快を感じたりき耶穌は此機に乗じて左の如くのたまへり

首領を以て奴僕と
したまふ
こと

爾曹の中大ならんと欲する者は爾曹の仕人となるべし、又爾曹の中首領たらんと欲する者は爾曹の僕となるべし(太二十〇二六、二七)又其衆多の者と弟子とに語りて

されど爾曹はラビと稱へらるゝ勿れそは爾曹の師は一人にして爾曹は皆兄弟なればあり、又地にある者を父と稱ふる勿れ蓋爾曹には天に在す獨一の父あればなり、又首領と稱へらるゝ勿れそは爾曹の首領は一人即ち基督なればなり、されど爾曹の中大なる者は爾曹の僕とならん、而して誰にても自ら傲る者は下げられ自ら謙る者は擧げらるべし(太二三〇八一—一二)

どのたまへり此訓誡は實に學得し難きものにして耶穌は附されたまひし前の夜再び他の形式を以て之を反復して「我は主又先生なるに尙爾曹の足を洗ひたれば爾曹も相互に足を洗ふべきなり」(約一三〇—一四)どのたまへり此等の聖言によりて吾人は相互に事ふるは眞實なる信

者の本分にして多く才能を有するに従ひて多く其勤務をなすべきものと決定するあり。利己と自負とは戒められたれど、單に主の旨をささんと欲し何れの處にても主に事へんと欲する者は必ず他人より尊敬せられ従て兄弟等より彼に推任したる位置を占むるとは通常罪過にあらざるべし。されども今述ぶる所の説には例外なしといふを得ず。蓋し信者といへども諛諛的稱號を用ゐるの習僻を作ることを得べければあり。凡そ質朴なる言語は最良のものにして官職的稱號はなるべく名譽あきものたるべし。然れども善良なる秩序と事業の成效とを得んが爲に官職的區別を要することあらんに基督の聖言は之をしも其臣民中に禁じたまふとは了解せられざるなり。

第九章 基督の王國の發達成蹟に關する其教訓

其王國は
増大すべ
きなり

假令基督の王國は其始は甚だ小にして世の王國と稱するもの、うちに於て最も小なるも教主は芥種の譬諭を以て其王國は遂に生育して大となり凡の王國の中の最も大なるものとなるべしと教へたまへり。太一三〇三一、三二)されど此發達の變化たる聲の聞くべきなく色の見るべきなきこと地より生ずる草木の生長するが如くあるべし、彼は亦他の譬諭即ち「天の王國は女が取りて三斗の粉の悉く脹るゝまで其中に納置きたる麪包種の如し」によりて同一の真理を教へたまへり。

此麪包種の譬諭と前の芥種の譬諭との間には些少かれど穩當なる區別あるを見る前の譬諭は基督教社會の擴張は洪大なる範圍に至るべきことを示し此の譬諭は其教が人間の洪大なる團體を通徹する同化的擴散を表す一は外延的にして一は内長的あり。

ブローダス

右に劣ることなく人々の中に存する其王國の大なる進歩を示すもの

あり、即ち耶穌が其復生の後其弟子等に與へたまひし命令、爾曹往きて萬國の人々を弟子とせよ〔太廿八〇一九〕是なり、此事業たる短年月を以て完成さるべきものにあらず、何となれば耶穌は、視よ我世の終まで常に爾曹と共に居るなり〔太廿八〇二十〕と附加したまひたればなり、之と同一なる思想は蓋し約翰傳中に存し、我地より擧げられなば萬民を己に引よせん〔二二〇三二〕といへる言語を以て之を示せり、亦之と甚だ相似たることは馬太傳中に存せる彼の一般の審判に係る画像の如き記事中にも豫め之を假定されたり、即ち、人の子己の榮光に於て諸の使等と共に來らん時は其榮光の御座に坐し、萬國の民を其前に集め、牧羊者の羊を山羊より別つが如く人々を別たん〔太二五〇三一、三二〕とある是なり、之に次ぐ所の記録に於ては凡の者多少王と其友とを知りたるものゝ如し。

萬民悉くは之に入

然して基督の教訓は明に其政治の周到にして人心を變更する感化力

とらざる

あるに係らず邪惡にして救はれざる人々が常に存在すべきことを假定せり、是其性相異なる人々の上に生ずべき福音の結果を表す種蒔の譬諭中に確言せられたる所なり〔太一三〇四一九、一九一二三〕猶又麥と草稗との譬諭即ちサタンの隠秘なる勤勉及び世の終まで陽に善良の假粧をさせども實際其心の邪惡ある人々の此世に存在するは避くべからざるとなるを前言したまへる譬諭中に一層廣濶明亮に陳述せられたり〔太一三〇二四―三三、三七―四二〕之と同一なる事實はタレントの譬諭〔太二五〇一四―三三〕及び之と相似たるパウソの譬諭〔路一九〇一―二七〕にも假定せられたり、此等の確定したる教訓に相對して麩包種の譬諭及び萬民を己に引よせんとのたまへる聖言の目的は萬民悉く罪と死とより救はるべしと教ふるものなりと主張するは億斷なりとす、凡そ言語の解釋法に於て例外ありとて規則を亡すべきものにあらず、若吾人が凡の米國人は其政治を自負せりといはゞとて此陳

述に一の例外なしと意味するにあらず、恐くば此政治を輕蔑する僅々少數の人々あらんも知るべからず、然れども凡そ普通の言語は數學上の恒式に於けるものゝ如く解釋すべきものにあらざるなり

今陳述したる基督の教訓に於ける意見は彼の人類の未來に横はる神聖なる危機即ち審判に付いてのたまへる聖言によりて確乎たるものとされり、此等の聖言の多くは譬諭の形式なれど其主要なる思想は常に明にして疑を容れざるなり、例へば其日多くの人我に語りて主よ主よ我儕御名を以て教へ御名を以て惡魔を逐ひ出し御名を以て多くの奇跡を爲しゝにあらずやといはん、其時我彼等に告げて我は嘗て爾曹を識らず惡を行ふ者よ我を離れ去れといはん(太七〇二二、二三)我誠に爾曹に告げん審判の日にソドムとゴモラとの地は其市より尙やすからん(太一八)然と斯る句を引照せば枚舉に遑あらずして四福音中何れの書にも之を發見することを得るなり、但し讀者は之を研究すること

其王國に於る未來の危機

を好むやも知る可らざるを以て左に之が引照を附加せり

太一八〇二二—三二、一一〇二十一—二四、二五〇一四—三三、三一—四六路一二〇—一三一—二二、一六〇一九—三一、二二〇一一—一四、約五〇二九、八〇二一

此等は耶穌が善人と惡人との間の終極の分離を語りたまへる多數の教訓の中より只二三の例を擧示せるのみされど明にかゝる分離を預言したまひしを以て確に決定的なりとす、耶穌は其王國に属する未來の事柄を説話したまひしときに其當時直ちに其聖言を聽く所のものゝ中に或者は未だ死なざる前にエハサレムは滅亡すべしと預言したまへり(太一六〇二八、二九可一三〇—一四—二三路二十〇九—一八、二一〇二十一—三三)而して彼のモーセの設立せし猶太教に終を來たせし此事柄を以て基督教の終末及び萬國を審判せんが爲に來りたまふ再臨を聯想したまへるものゝ如し(太二五〇三一以下)されど其聯想の連鎖

は此二大事柄の年代的に密接せる類似にあらずして状態の類似に存するあり吾人の見る所を以てすれば是基督の預言的聖言の最も明瞭にして信すべき解釋なるが如し何となればエルサレムとユダ國民との滅亡より基督教時代の終末に至るまでの間に長年月あることは歴史上の事實の證明する所なればなり。

第二編 使徒等に依て基督教々訓の發達せる事

彼者即ち真理の氣……爾曹を凡の真理に導かん約一六〇

一三

叙

讀者の既に記憶せらるゝが如く耶穌基督は其十一弟子に語りて「爾曹に告ぐべきこと多けれど爾曹今之に堪ふる能はず」(約一六〇一二)のたまへり此故に聖氣即ち真理の氣を彼等に送らんと約束したまへりあり聖氣は基督の言語を思ひ起さしむるのみならず未來に起るべき事柄を示し且彼等を凡の真理に導きたまふべき者なりしあり(約一四〇二六、一五〇二六、一六〇一三一、一五)此約束あるによりて使徒等をして永久動くことなき堅牢なる基督教的真理の基礎を置き得るに足らしむる聖氣の特別なる感化力を彼等に賜はりしと吾人が信すること

基督は十
聖人に
約束を
したまひ
しこと

は正當なるを得るなり(太一六〇一六一一九約二十〇二二二三弗二〇二十黙二一〇一四参照)

然して基督は此約束を始めて十一人にのみあし給ひしといへども他の基督教徒に對して彼等の拔群なる置位あるが故に之をなしたまひしに外ならず、故にパウロが異邦人の使徒として召されしとき彼が基督教を理の基礎を置かんとする其事業を爲すに當りて彼の先輩ある使徒等に與へられたるものと同一の聖氣の光明によりて佑けられんことを望みしは有理あることなりとす、而して此希望の成就せしめられしこと(羅一〇一—五哥前二〇十一一三、一一〇二三、一二〇二八—三一、一四〇二七加一〇一一、一二、二〇六—八)及び其教訓はヘテロ、ヨハチの教訓と等しく信を置くべきことは十分なる証據あるあり、勿論吾人は基督の約束中に眞理を記載し若くは筆記するときに限りて特別なる佑助を與へられ眞理を宣傳するときは之を與へたまは

又パウロにも約束したまひしこと

此約束は弟子等の傳記に記せらるるに應

すといふ如何なる指示をも見出すこと能はず、されど記載するときに當りて神聖ある光明を受くるの理由は宣傳する時に當りて之を受くるの理由に異なることなかりしかるべし、説教の教訓に宜しく誤謬あるべきことは緊要なりしが如く書簡の教訓も必ず基督の意に叶ふて設立したまひし宗教を傳へんとて彼の使徒等が従事せし如何ある時機にも應用し得べきものと了解すべきあり。

吾輩は此編に於て新約聖書中にある凡の書簡を以て眞正なるものと認定すべし、然れども其中の一二のものは其他のものを支持する外部の証據と相等しき証據を以て支持せられずと陳述するは適當なりとす、此事は彼得後書約翰第二書第三書及び其他の者に對しても幾何か眞實ありとす、されど此に特書せる書簡を後章に於て用ゐざるも使徒等の教訓は大抵同一なるものとありて存在すべし、新約聖書中の書簡

諸書簡の眞正なること

を研究するに當りて吾人は之と共に福音書使徒行傳の某々の部を聯想すべきあり。

第十章 三位一體の神に關する使徒等の教訓

神に關する
基督の再
臨の教訓

基督の人
性及び其
神性

使徒等の書簡の教訓は神の身位、權威、道義上の性質に關して基督の教訓に何を加ふる所なし、即ち彼は活ける神也(徒一四〇一五)万世の王即ち朽ちず見えざる獨一の神(提前一〇一七)光と愛(約壹一〇五、四〇八)我儕の主耶穌基督の父(彼前一〇三)基督教徒の父(羅八〇一五)凡の者の父(弗四〇六)万物は彼より出で彼により彼に歸す(羅一一〇三六)而して神は其造りたまへる諸物によりて人々の理性的能力に顯はれたまふ(羅一〇二十徒一七〇二十四一二十八)是記載されたる基督の聖言によりて何れの所にも明に教へられざる事實なり

諸の書簡中に基督の人性及び神性を認めたり、其人性は羅馬書中(一〇

性及び其
神性

聖氣の神
身位及び其

三八〇三、九〇五)彼得前書(一〇一九、二〇二四)希伯來書(二〇一四、四〇一五)及び多少の差あれども明に凡て他の書簡中にも説話されたり、其外基督の降誕と其幼時の生活とに關して記載したる馬太、路加の傳中にも之を説話したり(太一〇一八一二五、二〇一一二三路一〇二六一三八、二〇一一五二)ヨハネは實に其第一の書に於て基督の圓滿なる人性を否みたりといはれし某の教師を批難せり(約壹四〇三)之に相對して其神性は彼を神の子(羅一〇四、八〇三、三二)哥後一〇一九加二〇二十、其他數々)万物の創造主、又万物の支持者(西一〇一五一一七希一〇二、三、十)又一層簡單に主(エホバ)或は神(彼前三〇一五腓二〇一一羅九〇五約一〇一、二十〇二八約壹五〇二十西二〇九)と稱へて以て明に之を教へたり、されど區別上の便宜の爲神なる名稱は通常父即ち絶對的に神あるものに應用せられ、主なる名稱は通常基督を示すに用ゐらる。

聖氣は身位ありて神あるものとして表示せられたり例へば聖氣は神

の兒輩を導き(羅八〇一四)彼等の氣と共に證をまし(全八〇一六)凡の事を探り又神の深き事をも探りたまへばなり(哥前二〇十)神感を受けたる者を教へ(哥前二〇一三)基督教徒の體を以て其宮として之に居りたまふ(全六〇一九)其欲する所に從ひて精氣的の賜物を頒ち與ふ(全一二〇一一)基督教徒の品行を憂慮したまふもの(弗四〇三十)と稱へられたり

三位一體の教理の論據は基督の聖言中に存するものより使徒等の書簡中に存するものを以て一層十分なりとす例へばペテロは其第一書中に於て其讀者を以て「神の豫じめ知りたまふことによりて聖氣に聖められ柔順と耶穌基督の血を灌がるゝことゝに選ばれたるもの」(彼前一〇二、参照四〇一四)なりと記載しパウロは哥林多人に左の如く書き送れり

「願くは主耶穌基督の恩惠、神の愛、聖氣の交通爾曹凡の者と共に在ら

三一教理の論據は十分に分るに説明さるゝこと

んことを(哥後一三〇一四)

又羅馬人に書き送りて

我儕の主耶穌基督によりて神と和ぐ事を得たり、……聖氣に由て神の愛我儕の心に溢るればなり(羅五〇一、五)若神の氣爾曹の中に住みたまは、爾曹は肉に在る者に非ず聖氣に在る者なり凡て基督の氣なきものは彼に屬する者に非ず(全八〇九)耶穌を甦らせたまひし者の氣爾曹の中に住みたまは、耶穌基督を甦らせたまひし者爾曹の中に住みたまふ所の彼の氣に由て爾曹の死ぬる體を甦らせ給はん(全八〇一一)聖氣自ら我儕の氣と共に我儕が神の兒輩たる事を證したまふ而して基督と世嗣を同じうせん(全八〇一六、一七)

といへり、此等は只父と子と聖氣とが救拯の事業に協同したまへることを示す所の甚だ夥多なる句中の數例のみかれを悉く之を引照するは必要あるを以て只其一班を示すのみ、猶吾人は此教理に關する形

式的陳述或は其教理の道理あることを示さんとする何等の企圖をも諸書箇中に發見せず蓋し普通の英譯聖書に於る約翰第一書の五章七節は後人の挿入に係るものとして之を排斥せざるを得ざればなり。

三位一體の神に關して説話する時、記憶すべき緊要なるとは左の如し第一、三位一體の神に關する數多の事柄は決して背理の物にあらざるも其原因と關係とは之を了解する能はざる物あり、換言すれば人間の道理以上にある物なり、是れ吾人自己に於ける身体と魂との間にある結合及び心意の活動と手足の運動との間にある結合とに付いても亦然るを見るなり、諺に「天地の中には吾人の哲學中に夢想したる物よりも多くの物あり」といへり、第二、三位一體主義の人々は神が一あることを信ずるは其三なることを信ずるの意味に等しからずして此種の人々の多くは父と子と聖氣との間にある區別は身位的にして其統一の連鎖は神の實質なりと主張するものと吾人は之を推察するなり、而し

神の三一
に關する
説話

て此人々は其説の正しきか或は正しからざるかに係らず矛盾背理あることを信ずるものありといふ批離より全く免かるゝあり、第三、父と子と聖氣との間に存する區別を以て人間の間に存する區別に比較するときは實質上三位の二たることを結合する連鎖は其身位的區別を減するやも知るべからず、此點に付き精密に思惟し或は説話するの容易なることに非ず、されど吾人は全然道理あるものとして之を痛論せんとするなり、第四、神に關する三位一體主義の意見は惟一主義よりも其永久なること自ら圓滿なること及び其仁愛なることの觀念と更に能く調和一致するなり、そは此説は三一なる神は己自らの本質の範圍内に完全なる活動力と愛との凡の要件を有したまふと假定すべければなり、而して其愛は神自らにあらずして他の身位に歸するが故に發散的なり、且其愛は該身位の中に凡の善良なるとを見るを以て満足するあり。

第十一章 人に關する使徒等の教訓

使徒等の書簡中に人たるもの、宗教上の状態或は義務を説明する爲に必用なる教訓を除きて吾人は此書簡の記者等が人の性質に關する教訓を與ふる目的を有せしといふ證據を發見せざるあり、然れども宗教上の説明をなすに當りて人たるもの、推理或は智識、道德上の力或は良心、感情及び欲望、意志及び撰擇等に關して記述すべき必要を有せしこと屢なりとす、凡て此等のものは神と隣人とに對して人たるもの、現在の状態及び義務に付き完全なる陳述をあすにあたりて説明されざる可らざるものなり

基督は人間の罪惡に關して語りたまひしとき自らユダヤ人に向ひ特に彼等が神の前に犯せる最も重き罪惡を嚴しく責めたまへり、然るに殆んど凡の書簡は異邦人中にある基督の諸教會或は異邦人の市府中

ユダヤ人並に異邦人の罪あること

に樹立し且大抵異教より改宗せる人々より成立せる諸教會に向て記されたり、此故に書簡の教訓は基督の時より一層大なる範圍を取り異邦人もユダヤ人も同じく罪あることを確然斷言せり、何人も羅一〇一九―三〇二十に於るパウロの語を研究して彼が凡の人間の罪惡に滿つるを斷言せるを見ざる能はざるなり、義しき者あらず一人もなし、此故に律法の行爲に由ては一人だに神の前に於て義と爲らるゝ者なし、三〇十、二十之と同一なる事實はペテロ、ヨハネ及びヤコブの公言する所なり、彼前四〇三―六約壹一〇八雅二〇十、三〇二、然り此外基督より離れたる人の道德上の状態に關する意見、新約の諸記者中の何人によりても想起せられざるなり、凡の書簡は所々に恰も罪惡は人類中に周ねかりしが如く説話せり

使徒パウロによれば此の人間の罪惡に滿つることは密接にアダムの不柔順と結合せらるべきものにして、アダムによりて罪は世に入り凡

アダムの過失に關する係あること

の人々に通徹せりといへり(羅五〇一二、一九)此陳述に關しては種々の解釋あり例へば

第一、或る重要な意味に於て凡てアダムの子孫はアダムの中にあり、故に皆其不柔順に與かれり、換言すれば人類は皆に肉體上に於るのみならず精氣上に於ても一あり此故に人類の根原の行爲は人類全體の行爲なりしあり、其萌芽の本質は罪に墮落し從て之より流出して身位上の區別をなすべかりし凡の者は罪に墮落したりと、此説は動物及び植物の全範圍に於ける遺傳の事實と一致せるもの、如し。

第二、人々の中アダムの行爲に賛成し且之を好しとせしものを除かば其他はアダムの行爲の爲に責任を負ふべきものにあらずといへども凡の人々はアダムが始て犯し、罪惡に陥らんとするの傾向即ち道德上の状態を彼より遺傳せりと

第三、始めてアダムの犯し、罪と其子孫の道德上の状態行爲との間に

深き道德上の結合あらず又人々は我意の強き即ち神に叛かんとする先天的傾向を彼より繼承せず、蓋し人々の道德上の状態は生れながら正しきものにして各人は恰もアダムに於けるが如く己自ら或は確立し或は墮落するありと

右三種の解釋中第一は此使徒が常に主張して個人的過失に重きを置く語氣と相諧はず、亦第三は本節に於けるパウロの本來の語勢と明に相矛盾せり、此故に吾輩は第二を以てパウロの心意に於ける思想を表出せるものとして之を歓迎するなり、此故に内心より生ずるにもせよ外部より來るにもせよ幾何か神の旨を知るところの人々は皆故意に且其良心の抵抗に反對し(羅二〇一二—一六、七〇七—一四)罪を犯すに至るものにして若く先天的に邪惡に傾けるものなり、パウロは神の永久の力と其神聖なる性質とに付ての知識は人々達し得べき範圍中にあること及び律法の命令する所の行爲は人々の心に銘記されたりと

斷言して以て異邦人の罪あることを斷定せしことは觀察すべきなり、然り而して異邦人の罪の輕重は其罪に於ける彼等の知識の深淺によりて計定せらるゝなり、彼等は爲に設けられざりし律法によりて判斷せらるべからざるなり

吾輩は彼の終生白痴なるか又は嬰兒にして死せしものに對する神の意志につき何等の陳述をも書簡中に發見する能はざるなり、然れども人類系統に關し述ぶる所の凡の事柄は吾人をして斯る無知なる人々は神の恵によりて改良されんことを要する道德上の邪惡に付ては甚だ鈍き傾向を有せる者なることを信せしむるなり、但し斯の如き人々の状態は熱心なる宣傳者も實行的方法に於て殆ど何事をも施すこと能はざるものにして從て基督自ら及び其使徒等も之に關して述ぶる所若く希なることは怪しむべしと考ふることを得ざるなり、然れども神の仁惠と斯る人々の個人的不柔順より免るゝこと及び人間家族全

白痴に關する所なきこと

体に關する基督の關係を以て考ふるときは斯る人々の救はるゝことは少しも疑ふ所なきなり。

第十二章 基督の事業に關する使徒等の教訓

此章に於ては便利上基督の事業を二部に分つことを得べし、即ち基督自らの傳道によりて成就せるもの、他人の傳道によりて成就せんとするもの是なり、吾人は自然の順序に従ひて基督自らの行爲と其苦痛とよりなれる傳道事業によりて成就せる事柄に關する使徒等の教訓を以て此章を始むべし。

吾人の主の生涯并に其苦死の外部の状態は四福音書に記載せられたりといへども其道德的方面の意味と其結果とは一層十分に使徒等の書簡中に論せられたり、此故に使徒等の此教訓は基督が意味深遠なる僅少の聖言を以て暗指したまひしもの、推演と考ふることを得べし、

基督の死の上は、一層十分に分る陳述せ

基督が猶弟子等と共に居たまひし間には弟子等は其十字架上の犠牲の理由を了解すること能はざりき、されど後に至りて彼等は深き感情を以て其理由を論せり。基督の死の必要、功德、結果は屢其書簡中に論せられたり、されば吾輩の爲し得る最良なる方法は簡單なる説明をあたふが爲に多數の詞句中より少數のものを撰ぶにあるのみ、吾輩は試に左の諸句を撰みたり(羅三〇二四—二六加三〇一三提前二〇五希九〇一四、一五彼前二〇二四約壹二〇一二)

羅三〇二四—二六

只耶穌基督の贖罪に由り神の恩恵を受けて功あしに義とせらるればなり、既往即ち神の忍び給ひし時に犯したる罪は之を看過したまひし故に神は其義を顯さんために、耶穌基督を立て、其血に於ける

義とせらるる

信仰によりて宥免の供物と爲したまへり

「義とせらる」と譯せられたる分詞の原語は「義と宣告せらる」或は「義しきもの」として嘉納せらる」と意味す、而して此分詞は新約に於ては品格或は行爲を以て義とせらるゝことを意味する爲に用ゐられたることなし、又此には道徳上の正義或は無罪なるの理由を以て「義と宣告せらる」と意味するを得ず、何となれば自ら義しきものを義と宣告するは恩恵の事にあらざればなり(太一一〇一九、一二〇三七、羅二〇一三、四〇二、五〇一九、加二〇一六)

贖罪

「贖罪」と譯せられたる語は文字通りに「赦し成は」贖の爲に赦すこと」を意味す、而して此語は贖を受納するもの、働を表はし、之を拂ふもの、働を表はさず(弗一〇七西一〇一四)此故に「罪の赦免」及び此赦免は贖に似たる若干の物品を拂ふが故に與へらるゝものなりといふ附加的思想を表はすものなり、從て「義とせらるゝ」は絶對的恩恵の作用にして其要

件は基督の執成し即ち其苦死の故を以て罪の赦を受くることを意味するなり

宥免の供物

「宥免の供物」と譯せられたる語は和らげ寛くするものを意味す、此原語は形容詞なりといふを得べきかも知るべからずといへども恐くば形容詞上の名詞ならん、何れの處に於けるも此語の意味は同一なり、されば吾人は此語の意味を變ずることなしに「宥むること」及び「宥免の供物」或は「宥免の」と三様に之を譯するを得べし、而して此語は罪人の心意に於ける影響を指すか或は神の心意に於ける影響を指すかといは、勿論神の心意に於ける影響を指すと斷言すべきなり、何となれば此使徒の表示する所の者即ち人々の罪惡の故を以て之に怒り彼等を以て當に罰せらるべき者とす、所のものは神を指せばなり（羅一〇一八、三〇一九、五〇九）通常雅文記者等の記す所によれば宥めらるべきものは己に對して害を興へられたることを怒る所の者を指せり、然れども

パウロは罪人を以て神より害を興へられしものといはず否神より害を興へられしと思へるものとすら認めざるなり

同一の語原より來れる名詞は約翰第一書中に用ゐられ（二〇二、四〇十）且正に「宥免の供物」と譯せられたり、例へば誰か若罪を犯さば天父の前に我儕に辨護者あり則ち義者なる耶穌基督なり、彼は我儕の罪の爲に「宥免の供物」とありたまへり唯我儕の罪の爲のみならず又世界中の罪の爲なり」と換言すれば父と共に在したまふ基督は吾人の爲に罪の赦免を保證するに有力なる辨解者あり、何となれば彼は其死の功德によりて罪の爲の「宥免の供物」たればなり、此節を熟察すれば其影響は明に父の心意に存するを見るなり（約一〇九參照）

「なだむ」といふ動詞は希伯來書の記者之を用ゐたり（二〇一七）此處には耶穌其臣民の罪の故に「なだむ」をなさんために（日本譯には罪を贖はんとためとあり）己自ら其兄弟ある性質を取りたまへりといへり、又同一

なる働詞は吾人の救主が税吏の祈禱に付て語りたまへるとき之を用ゐたまへり「神よ罪人なる我を憐み給へ」我をなだめたまへと原語相同じ（路一八〇一三）而して此處には疑ひもなく彼の税吏は罪の爲に神殿に於て捧げられたる流血淋漓たる犠牲に心を留めて斯く祈れるものと思惟せらる。斯て此使徒等の教訓は耶穌基督の教訓と一致し且之を解釋するなり

信仰によりて

「信仰によりて」と譯せられたる語は長くして集合したる句中に挿入せる甚だ簡單なる表出の一例にして左の二つの思想中の孰れかを想起せしむるためなり即ち其一是基督の死の意味を以て神の義と其恵との表示なりと認むることを得るは只信仰の氣によるのみといふこと是なり其二是罪人が基督のなだめの恩恵に與ることを得るは只其心より彼に依頼するにゐるのみといふこと是なり前説に従へば基督の十字架は只之を信する者に限りて神の智慧なり後説によれば只之を

罪を寛容したまふ

信するものゝみに贖罪なり而して此兩説は共に信實なりパウロは兩つあがら之を想起せしめんと欲せしことは能はざることにあらざるなり

「其義を顯はさんため」とは基督の宥免の死によりて成就せらるべき結果若くは目的を表す「其義」とは罪と罪人とに對する神の待遇上に顯れたる其性質の正義なることを示すものゝ如し、上にある句を参考すれば此説明を好しとす即ち「既往即ち神の忍びたまひしどきに犯したる罪は之を看過したまひし故に是あり而して此句はカルバリ山に於ける神に定められたる犠牲の爲に其理由を示すものなり、勿論之を以て唯一の理由を示すものとなすにあらざれども理由の一とするなり、抑も神は罪人の上に至當なる罰を課したまはざりし其寛容の故を以て神の正義は過去の時代に於ては十分に顯れざりしが故に基督の死は其正義の顯現を完成するに必要なりしなり、換言すれば神が以往に罪

あるものを待遇したまひし方法は基督の死の必要を生せしめたるなり、更に換言すれば神は世の始の前に十字架の上に其子の死を前見して働きたまひしなり、是神が人間を統治したまふ義と其愛との十分なる辨解あるべく亦辨解なりしなり、而して又是基督に於ける信仰は神に對して平和を得るに缺くべからざる要件たるの理由あり、上に引照したる他の數句を左に記す亦精細なる研究を要するものなり。

他の數句

基督は律法の祟より我儕を贖ひ出さんとして自ら我儕の爲に祟を受くる者となり給へり(加三〇一三)夫神は惟一なり又神と人との間に一人の仲保即ち人ある耶穌基督あり、彼は萬民の贖罪となさんとして自己を捧げたまへり(提前二〇五、六)況て限りなき聖氣によりて疵なき己が身を神に獻げたまひし基督の血は爾曹が活ける神に事ふる爲に死に属ける行爲を去らせて爾曹の本心を深めざらんや、此故に彼は新しき契約の仲保と爲りたまへり是始の契約の下に犯せる罪

の贖の爲に死は行はれたるにより彼の召されたる者等は約束の限なき家督を受けんが爲あり(希九〇一四、一五)彼は我儕が罪に對しては死にて正義に對しては活くる様木の上に懸りて我儕の罪を己の身に負ひたまへり彼の痰に由て爾曹癒されたり(彼前二〇二四參照 哥後五〇一四、一五、二一)

基督の身代りの死は明に此等の句中に教へられたり、然してパウロの四大書及び希伯來書は特に其死の意味必要に關して基督の教訓を開展する章句に富めるものあり、且讀者は基督教の真理の此部分の幾何かを了解せんと欲せば此等の書簡を熟讀すべし。

新約聖書中の書簡は基督の自ら犠牲となりたまひしことを以て凡の人間否恐くば他の實在物に對しても行はれたるものありと指示する事實は之を讀者に告知する必要なくんばあらざるなり(約壹二〇二提前二〇一―六希二〇九哥後五〇一五、一九、二十、彼後二〇一、又約三〇一

基督は凡人類の爲に苦しみたまふ

六一七)此終末の引照はヨハ子自らの言語なるかも知るべからず而して猶一層廣濶なる引照としては弗一〇十西一〇二十を参照すべし

第十三章 基督の王國に關する使徒等の教訓

吾輩は是より基督の事業の第二部に進まんとす、即ち他の者の傳道によりて成就せられんとする部分はなり換言すれば聖氣及び人々の働きによりて成就せられんとする部分に進まんとす是時としては贖罪の事業と名付けられたるものなり、されど贖罪なる語は既に説明せし如く此事業の或部分にのみ應用し決して其最も肝要なる部分を意味せざるなり。救拯事業といへば一層十分なる表出なるべしといへども此れすらも其意義或は多きに過ぎ或は少きに失す即ち基督の犠牲的磔死をも含有すと假定せられれば多きに過ぎ福音を拒む者の爲になさるゝ何事をも含有せずと假定せられれば少きに失すべし。

新生に
りて其王
國に入る
こと

第一編に於けるが如く題目の自然の順序に従ひて基督の王國に入らんとする事柄に關して使徒等の教訓を考究せんとす、此國に入ることを得しむる變化の洪大なることは之を示すに用おられたる強大にして譬喩的なる言語より之を學ぶことを得べし、例へばパウロによれば此變化は「新生」と名付けられ(多三〇六)ペテロによれば「新に生れしめ」(彼前一〇四、二三)ヨハ子によれば「神より生れ」(約壹二〇二九、三〇九、四〇七、五〇一、四、一八)と名付けられたり、此故に此變化は依て以て一種の生命の創始せられたることなり、此變化は亦パウロによりて「甦り」と名付けられたり(羅六〇四、五、八、一一、二三、弗二〇五、六、加二〇一九、二十)猶又同使徒によりて「新に造られ」と呼ばれ(哥後五〇一七、加六〇一五、弗二〇十、四〇二、四、西三〇九、十)斯く作られたるものを「新らしき人」或は「新に造られたる者」と名付けられたり

此變化の性質は之を神の作用に歸することによりて十分に啓示せら

此變化の性質

るれども使徒パウロは之を経験する者をして暗黒を出で、光明の兒輩たらしむる作用なりとして之を指示せり(弗五〇八)彼は亦異邦人に向ひて其傳道事業を示すに當りて耶穌の「爾彼等の目を啓き彼等が暗黒より光明に歸し」(徒廿六〇一八)と曰へる言語を用ゐたり又ペテロは彼の信じたる讀者に「爾曹は選ばれたる人種王なる祭司の伴侶聖き國人贖はれたる民なれば爾曹を暗黒より召し出して其奇異なる光明に入れ給ひたる者の威光を顯すべきあり」(彼前二〇九)といへり。此故に此變化は依て以て聖き動作をなさんと欲する品性が人の中に創始せられたるとをいふなり、且引照したる諸句は之を神の作用に歸して説話したり。然るに此は道德上の傾向と感情との變化にして神の動作が直接に人間の感情行爲と共に協同せるなり。而して人の道德上の自由は新なる精氣的生命を生ずるの故を以て干渉せられざるなり、是新生に入ることば人間の意識よりいふと

神の動作

きは悔改或は信仰即ち神に對して悔改むると耶穌基督に對して信仰を懐くとなりと思惟せらるゝ事實によりて明瞭なりとす(徒五〇三一、二十〇二一、一六〇三一、一六〇一六)悔改とは思想、欲望、傾向に於て全く罪惡より正義に還り自己を捨て、神に歸することにして信仰とは基督を以て己の救主且王として心より之を奉戴し赦免を請ひ恩惠を受くる爲に孝子の父母に信任するが如く之に依頼することなり。斯の如く個人的内心の行爲は聖氣の見えざる感化力によりて提起せられざる可らずといへども其故を以て如何なる他の道德上の行爲よりも自由の少きものにあらず、此行爲は又宗教上の真理就中福音の感化に頼らざる可らざるものなり何となれば人魂は真理の奨励に應じて凡の道德上の行爲を成就すればなり。此故に基督を意識的に受納することは彼を示す所の真理の輔佐によるものなるを以て新生の根原は福音に歸し(羅一〇一六、哥前二〇一八)若くは福音の宣傳者に歸す(哥前四〇

一五)然るを以て思想の順序に於いて、第一は人魂に於ける神の作用、第二は人魂に對する基督の眞理の奨勵、第三は宣傳者の熱心と愛とによりて其奨勵に補助を與ふること而して終末に悔改と信仰、即ち意識的に基督に於ける新なる生命に入ること是なり

聖氣の作用によりて起れる此變化に於て基督の王たること或は其首長たることは自ら預定ある語中に其意味を含有せり、例へば神の叡智にして永遠の昔よりの目的に従ひて基督は其臣僕をして一定の時期に或る國民よりも先に他の國民に其福音を宣傳せしめ或は表面上同一ある境遇にある或者よりも他の人々の改心を求めしめ或る人々に向ひてよりは他の者に向ひて一層長く且一層有望なる事業を繼續せしめ給ふべし、而して基督は福音を受くる爲に或者を準備したまふよりは一層十分に或る國民若くは或個人をして之を受くるに適當からしめたまふ、而して是恐くは吾人の了解すべき範圍の外なるべしとい

て預定に於
る基督の
王たるこ

へども常に正常なる道理を以て之を定めたまふことは疑を容るべからざるなり、凡そ此問題に關する諸句は絶對的公平を以て之を研究すべし、何とあれば吾人は神の完全なる叡智と仁愛とに深厚なる信頼を有すればなり(雅一〇一八、二〇五、彼前一〇一—三、羅八〇二八、三〇九、一一、二、四、弗一〇四、五、九、一一、提後一〇九)悔改及び基督に於ける信頼と恰も同時に基督と精氣的結合あり、又精氣結合的あると同時に罪の赦養とせらるゝこと及び子とせらるゝことあり、斯て基督を信する者は神と和ぎ神の榮光の望を以て喜ぶなり(羅五〇一、二、八〇一四—一七)假令猶自ら罪あることの意識ありども其罪は赦さる假令律法によりて罪せらるゝこと確なりとするとも其者を害ひ或は驚かすべき罪の力より救はる、而して假令其者自己の權利に於て其價值なきも彼が基督と一致せる徳を以て子即ち世嗣とせらるゝなり。

基督の王國に於ける生命及び生長に關する使徒等の教訓は全く基督

の教訓に合へり、且或る關係に於ては一層十分ありとす。愛は凡の正しき行爲を起す刺激と認められ、基督教善徳中の最大なるものとして賞讃せられたり(羅一三〇十哥前一三〇一—一三)神に對する愛(哥前二〇九、八〇三約壹二〇一五)兄弟に對する愛(羅一二〇九、十、加五〇一三彼前一〇二二、二〇一七約壹四〇二十、二一人に對する愛(羅一三〇八、十、十二〇一三雅一〇二七、二〇八、九、三〇一七)仇に對する愛(羅一二〇一四)は單に同じく神聖なる刺激の相異なる動作なるのみと論せられたり、彼の吾人を基督に結合する傾向及び彼よりの仁惠の媒介たる信仰すらも愛に依て働くものありといはれたり(加五〇六哥前一三〇二)然り、信仰の行爲(例へば帖前一〇二)に付て説話し、信仰より生ずるもの、如くある基督教の諸徳の目録(彼後一〇五、六)を記載する諸句ありといへども、斯る句の眞の解釋は信仰は身位あるものに對する孝順なる信頼にして、實際愛の感情を其内に含有すとせり、事實上基督教善徳の主なるも

のは信、望、愛の三にして交互に相貫通して實に之を分立せしむること能はず、望と愛とは見えざる者に於ける信仰に依頼し、信仰は其依頼する者に對して愛さくんば決して堅固なること能はざるなり、此故に愛は眞正なる信仰に含有せらるゝか或は獨立せる徳なるか孰れに認定せらるゝとするも神聖なる行爲を刺激獎勵せんとするものなり、パウロ、ペテロ、ヨハネの書簡中に表示せられたる基督信者の行爲の目的と其動機との間に存する如何なる實際の差異をも發見するは難事ありとす。神と人との對する愛の律法は凡て彼等の主張する所にして、不思議なる同意を以て特別なる實例に應用する所なり、此人々は基督の教訓と同一の意義を以て萬民に對して基督がユダヤ人に應用したまひしと同一の主義を證明せり、且此關係に於ては雅各書或は希伯來書と相比してペテロ、ヨハネ、パウロの記録の間に少しも差異あるとなし、諸の書簡中の倫理的教訓の廣狹を認めんとせば左の二問題に答へん

とする考按を以て之を研究すべし即ち第一は如何なる種類の罪が彼等の責め戒むる所なるか第二は如何なる種類の徳が彼等の賞讃する所なるか是二問題なりとす凡そ道理に戻るとかくして採用せらるべき罪と徳との如何なる分類によるも凡の種類の罪惡は責められ凡の種類の善徳は賞讃せられしとを發見すべし社會學は彼の憂へて反對せらるべき邪惡の目錄に何をも附加する所なく彼の養成さるべき善徳の目錄に何をも附加する所なきなり邪惡の外形的形式は近世に於て變化したるべしと雖も罪を犯さんとする傾向は大體上變化せられざるなり若之を疑ふものあらば此陳述の證明を以て數紙を充たすことを得べし然も要用ならざるを以て之を省く之に反して凡の社會上の徳義并に凡の宗教的義務は主要なる條項として使徒等の教訓中に含有せらるゝことを示すは困難の事に非ず聖氣の結ぶ所の果は仁愛、喜悅、平和、耐忍、慈悲、善徳、信仰、柔和、博節あり(加五〇二二)是只其一例なり、

他の諸句は、精氣と行爲とに於ける美麗なる凡の物を之に附加したるなり

其一二の例は之を研究するも亦宜しかるべし、パウロは人體の調和其諸部の相互の依頼及び各肢に歸すべき尊敬を認めたり(哥前一二〇一四—二六)彼は又身體は神聖なる目的に用ゐるべく神聖ならざる目的に用ゐるべからず、且身體は主の爲に存して主は身體の爲に存したまふと主張せり、彼はコリント人に彼等の身體に於て神の榮光を顯はさんことを勧め彼等の身體は聖氣の宮殿ありと公言せり(哥前六〇一—三—二十)羅馬にある基督信者に書き送りて他の譬諭を用ひ「我神の深き矜恤に依て爾曹に勸む爾曹の身を獻げて神に喜ばるゝ所の聖き活ける供物とせよ是爾曹が爲すべきの務なり」(羅一二〇一)といへり、パウロの身體たる或は弱くして且恐くば殘なはれしものあるかも知るべからずといへども其身體を以て主に供するを得しことを以て賞讃すべ

き職務なりとし自ら之を喜べり(腓一〇二四)之と同じくパウロは人間の魂氣の諸能力例へば、知力、感覺、意志、理性、良心、撰擇力等を尊び人の知力は人をして自然に神の啓示を見ることを得しめ(羅一〇二十)其良心は人に神の律法の幾分を示し(羅二〇一二—一五)其邪惡を撰ぶは他より之を強ひらるゝにあらずして言ひ釋くべきよし(羅一〇二八、三二、二〇二)と教へたり。又コリント人に「智慧に於て幼兒たることあかれ」反て「成人たるべし」(哥前一四〇二十)と勸めエヘソの信者等には、榮光の父は己を知るとに於ける智慧と啓示との氣を爾曹に與へ給ひ且爾曹の心の目明になりて云云(弗一〇一七、一八)と祈れり

ペテロ、ヨハネ、及びヤコブもパウロの如く凡の信者は最良なる方法を以て其凡の才能を練磨し且之を使用すべきことは其義務なりと思惟せること又其書簡には基督の友たる者は神を畏れて己の時世の人々に奉公する生活の道に關する主義暗示に富めることを示すり容易

の事なりとす。特にペテロ、ヤコブ及びパウロは家庭、國家及び事務上の事柄に於ける人々の複雑なる關係を論じたり且彼等が教ふる所の課目は永久適當にして權威あるものなることは止むべきなきべし。

第十四章 王國の協同に關する使徒等の教訓

基督の政治の下に秩序と協同との行はれんことが望まれたることは使徒等の書簡中に十分なる證據を備へたり其臣僕たる者は分争と混雜とを生ずることなく神の名譽のため及び實際之と同一事なる人々の幸福の爲に相與に働くべきことを教へられたり、彼等の行爲に流行すべき協同の方法に關しては若干の教訓を與へられたり、而して此教訓は言語によるにもせよ將た實例によるにもせよ基督教の禮典、教會及び禮拜の時期に關するものなり。使徒等の書簡によれば二個の基督教禮典あり即ちバプテスマ及び聖晚餐是なり然して之を別々に論ず

るの要あるべし

基督教の
バプテスマ

基督教のバプテスマは父と子と聖氣とに對する奉仕及び献身の生涯に入る表號的告白として基督信者を水中に沈むることは是なり。此禮式の實行すべき事件は「沈め」なりと信する理由は左の如し
バプテスマを表示する爲に撰まれたる原語即ちバプテゾー及びバプテスマなる語は撒水注水よりも寧ろ中に沈むる下に沈むるを意味す、是古今最も碩學なる字彙學者等の證する所なり。東洋教會即ち希臘教會は常に沈めを行ひ西洋教會即ち天主教會は第十二世紀まで沈めを行へり。此方式即ち此方式のみパウロの解釋せる如く此禮典の表號上の意味に叶へり(羅六〇三—五西二〇一二多三〇四徒二二〇一六)バプテスマに伴隨する多くの事情は、假令此方式の意見の如きことを要することあしとするも、此方式を好しとするなり(可一〇五約三〇二三徒八〇三八)多くのビドバプテスマ派の解釋者は公平なる心を以て此

バプテスマを受く
べき者

方式は此儀式上の行爲を表示する爲に用ゐられたる原語の意味にして使徒等及び古代の基督信者が以てバプテスマとして施したる方法なるべしと承認せり。

バプテスマを受くるに適したる者は只己の救主且王として基督を信仰する證據を示すものに限る。吾人は第一、基督自ら其弟子等に與へたまひし命令(太二八〇一九)より第二、新約聖書より學び得らるゝ限りに於て其使徒等の實行せる所より(徒二〇四一、八〇一二、三五、三六、十〇四七、一六〇一四、一五、三二、三三)正しく之を推察するを得るなり。又家族のバプテスマの記録せらるゝ所に於ては此等の家族は既に信じて然る後にバプテスマを施されしと主張する良好の理由あるを見る(以上の引照の外哥前一〇一五、一六〇一五參照)第三、此儀式的執行の意味より正しく之を推察するを得べし、何となれば此意味は明にバプテスマを施されたるものと新生を指示すればあり(羅六〇三—五等)第四、基督の

バプテスマを施す
べき者

主の聖晩
餐

政治の性質即ち其精氣的性質より正しく之を推察し得るなり。バプテスマの執行者に關して新約聖書中に言語上の教訓を與ふる所なし、然るに左に記す所の例(可一〇四約一〇二五、三三、四〇一、二徒八〇一、二、九〇一、一八、十〇四七、四八、一六〇一、一五、三三、一九〇五、六哥前一〇一四一、一七)及び諸教會に於る秩序禮儀の中に尊崇せられたる置位より考へて吾人は基督に召されて諸教會に是認せられたる牧師が此禮典を執行するか少くも其執行を監督すべきものなることを推察するなり、されど嚴格に之を言ふときは此儀式の眞正ありや否やは執行者の位置に係るものなることを證明するは爲し能はざるもの、如し主の聖晩餐は耶穌基督が其贖罪の紀念として設立したまへるものなり(哥前一〇二三—二六)此儀式は祈禱及び基督の體と其血との表號と認めらるゝ麴包と葡萄汁とを信者相共に飲食するとより成れり、此飲食の執行は聖晩餐に與るものは斷ゆるとさき精氣的生命の根原と

して十字架に附けられたる基督を其心に感銘して之を奉戴することを表す、是其贖罪の死に於ける信仰及び救拯の爲に彼と生命ある結合を信頼することを表す新なる告白なり、麴包のみ又は葡萄汁のみに與ることは兩品に與ると同じ意味なりと考へ、又は教會の役員のみ管て兩品に與りしが普通の信者は只麴包のみに與りしといふことの證據は新約聖書中一だに之あるとさし、主の聖晩餐の「麴包劈き」(徒二〇四三、四六、二一〇七、一一)と稱へられたり、何とされば此禮式の著しき部分は「麴包劈き」なる語を以て之を表すに十分ありしが故にして祈禱を捧げ麴包を食ひ葡萄汁を掛ぎ又之を飲むことは此紀念的儀式の同一に要用なる部分にあらざりしが故にあらす、主の聖晩餐の自然の意味及び新約聖書に於て之を指示するは特に哥前十〇一六、一七、一一〇二十一、三四にして此儀式の教會によりて執行せらるべき者なることを示す換言すればバプテスマを受けたる信者等の集會して執行すべきものに

基督教の教會

して信者一人若くは相互に規律ある聯合を有せざる信者の團體の之を執行すべきものにあらず、是最も神聖なる禮典にして基督教の眞理に對する其證據は甚だ明白にして感銘すべきものなり。吾輩は基督教會といふよりも寧ろ基督諸教會と稱ふることを好めり、何とすれば新約聖書中の書簡は此語を好しとすればなり、蓋し此語は複數を以て三十五回用ゐられ、一地方の會衆を明示するところには單數を以て五十六回用ゐられたり、然るに救はれたる者全體を示すに只十七回用ゐられたるのみ、此故に

- (一) 基督教會は基督の啓示したまへる意志に従ひて其禮拜と禮典とを奉持するパンテスマを受けたる信者の一社會なり(徒五〇一一、八〇一、羅一六〇一、四、一六、二三、哥前一〇二、四〇一七、一一〇一六、一八、二二、等)
- (二) 基督教會を員相互の固有の關係は兄弟的及び同聲的のものなり(太二三〇八、徒六〇三、哥前八〇一二、加三〇二六、四〇七)此陳述の全體の意

義及び精密なる限界を思考せず、蓋し其關係は基督信徒たる者の固有的根本的且宗教上同輩たることを指すものにして教會以外の民事上に於ける關係或は社會上に於ける地位の關係を指すにあらず、されど信徒相互の關係は後段に於ける關係にも緊要なる効果を有すべき者あり。

- (三) 教會員を破門し又は受納するとは各教會全體に屬し其職員のみに屬せざるものあり、即ち破門する權利あることは亦受納する權利あることを前以て假定するものなり(太一八〇一五、一七、羅一四〇一、哥前五〇一、三、哥後二〇六、七、多三〇十、帖後三〇六、提前五〇一九)
- (四) 基督教會は主耶穌基督に於ける信仰の信用すべき告白によりてパンテスマを施されたるものに限る會員として之を受納すべきなり(徒二〇四一、八〇一二、一三)

- (五) 教會が其要用なる事務に關して其資格ありと考ふる者を某の職務

の爲に其會員中より撰定することは各教會の權内に属するものなり
(徒一〇二一以下六〇三、一三〇二、三、一四〇二六、二七、一五〇二)斯く撰定せられたる會員は成るべく既に其同職に従事するものより恭しく其職務に任せらるべし。

(六)其牧師が其職務のために適當なる報酬を受くることを認定するは各教會の義務なり(希一三〇七、一七、加六〇六提前五〇一七、一八哥前九〇一四全七一一参照)

(七)基督教會本來の職員は二級に區別せらる監督と執事と是也。監督は又長老、牧師、教導者、會長、教師と名付けられたり、其職務は彼の使徒等の職務の如く奉事或は勤務と稱へられたり(徒一一〇三十、二十〇一七多一〇五弗四〇一一徒二十〇二八希一三〇七、一七、二四帖前五〇一二提前三〇一一弗四〇一一、一二提前二〇二多一〇八、九西四〇一七提後四〇五)

基督教會の役員

牧師或は監督

基督教會の牧師或は監督は其従事する諸教會を監督し福音を教授し詐りの教師を責め且其誤謬を論駁し適當なる懲戒を主張し、一言以て之を曰ふときは凡の精氣的事柄に於て教師たり教導者たり又模範たるべし(徒二十〇二八弗四〇一一、一二提前三〇一一七多一〇五―九彼五前〇一―四提後二〇二希一三〇七、一七)

使徒行傳及び新約聖書中の書簡は執事の上に教會の役員は只一の階級ありしとを證明し且ピシヨップ即ち監督及びプレスビウター即ち長老なる語は二つながら此階級を示すに用ゐられたることを證明せり(徒二十〇一七、二八提前三〇一一七、八一―一三多一〇五―九腓一〇一二)テトスがクレテに於ける多數の教會を治むる監督なりし證據は少しも之あることなし、彼は傳道者として其處にあり且パウロに隨從し各教會の執行によりて其上に長老を撰擇し且之を任せしむべき者なりしが如し恐くばテトスは此等の長老或は監督の按手禮に與りしならん又

多くの教會は一人より以上の長老を有したるもの、如し、然れども凡の教會は一人以上の長老を有したりしや否やは疑はしきものと認められたり(徒一一〇三十腓一〇一多一〇七)教會として一教會の成立する要件は必ずしも多數の役員若くは實に一人にても役員を有するの故によらざりき、ピショップ等は教會に於ける監督にして之を治むるの主長にはあらざりき(徒二十〇二八彼前五〇一一三其執事との區別は監督は……教を善くし)且正しき教を以て勸め又言ひ逆ふ者等を辨解くを得ん(提前三〇二提後二〇二多一〇九)なり斯の如くして彼等は其教會を治めたり

執事
基督教會の執事等は牧師たる者の傳道事業に於る下級の義務特に貧者及び病人を訪問して牧師を助くべきものなりき(徒六〇一以下羅一二〇七、一六〇一二、二哥前一二〇二八提前三〇八一一二)執事たるものは其職務の權利を以て教會の凡の會計を司るべきものなりといふ十

傳教者及
び宣教師

分なる證據あらざるなり

傳教者は只福音を宣傳し或は教會の勤を負はざる牧師ありき(徒二一〇八參照全八〇四十弗四〇一一提後四〇五)新約聖書に於ける此語の意味によれば當今の多くの宣教師は傳教者と認めらるべき者なり、新約時代の使徒及び預言者は通常教會の役員にあらざりき、斯て彼等は基督の政治の歴史中今日に至るまで其後繼者を有せざりき、されど聖書中にありて今猶吾人に語り吾人の教師として其權威を用ゐるあり、基督諸教會の關係は兄弟的なるもの、如し、此等は皆同等にして同一なる主の下にありて同一神聖なる目的の爲に働き且相互に各教會の働きを尊敬すべきものなりき(哥前一〇一六羅一六〇一六哥前一六〇一九哥後三〇一加二〇十哥前一六〇一、三、四、哥後八〇一一六、一八一、二四)以上の引照の半以下によれば諸教會は其別々の存在及び獨立を危うするの虞なく大事業の爲に協同して働くことを得ること明なる

べし、教會の斯く共同せし主義を應用せば數多の時機に於て最も便益なることあるなり。

基督敎禮
拜の時季

一ヶ年間に基督敎の禮拜は五十二回あり即ち毎週の初日なり、共同的禮拜及び逸樂の爲七日中の一日を分ちて普通の勞動を休止するとは人々の身心上に利益あること及び毎週の休日定むるに基督が勝利を得て死人の中より甦りたまひし日を用ゐるの適當なることは自ら明白にして使徒等をして此等の事は既に定まりたるものなれば凡の信者も喜んで等しく之を守るべしと信せしむるに至りしなるべし、且又使徒等はユダ敎の毎週の安息日に慣れ且安息日其物は神聖なるに非ざれども寧ろ人生の幸福の爲に設立聖別せられたるものなることを基督より學びたりき、而して此敎訓は神の自然的創造の完成を想起せしむる日より、其犠牲的事業の完成を想起せしむる日に移ることをして比較的容易ならしめたるあるべし、斯く移動せる後使徒等は週

週間の初
日

間の第一の日は凡の基督信者に對して神聖なる休息と逸樂との日即ち週間中の眞珠の日なりと感せざるを得ざりしなり、而して假令福音を携へてユダ敎を墨守する親戚に至る爲にユダ敎の安息日(土曜日)に其會堂に參詣する慣習を有せしといへども彼等自らの集會は週間の第一日即ち久しからずして主の日と稱へられたる日あるとは新約聖書中に於て吾人が所々に發見する所なり(哥前一六〇二徒二十〇七黙一〇十希十〇二五)此終末の引照はワイサツカーによれば汝等自己の集會に至らざる」と譯せられたり、此譯文は吾人をして當時の基督信者はユダ敎徒の集會とは場處も時間も全く相異なりたる自己の集會ありしことを想起せしむるなり、但し此節に於ては其集會は週間の初日なることは告ぐる所なし

吾人は第二世紀時代の諸教會の實行せる所を以て第一世紀時代に於ける諸教會の實行せる所の者の確實なる證據なりとして之に依頼せ

すと雖もジヤヌチン、マーターは第二世紀の上半紀に於て基督教徒が禮拜及び聖晚餐に與るために日曜日（即ち日曜）に相集りしとを證明せり、即ち日曜の日と名付けられたる日に市府と田舎とに住める凡の者共に一處に集り且使徒等の記録或は預言者等の書を時間に應じて朗讀せり

ジヤヌチンが羅馬帝に捧げたる此陳述は基督教禮拜及び主の聖晚餐の簡短なる説明及び左の解釋をも附記せられたり。

されど吾人は皆日曜日（即ち日曜）を以て上下の隔てなく同一の處に集る、是神が暗黒と粗雜なる物質とを變じて宇宙を作り給ひし第一の日にして吾人の救主なる耶穌基督は此同じ日に死人の中より甦りたまひしが故なり。何となれば土曜日（即ち土曜）の前日ユダヤ人は基督を十字架につけ又土曜日（即ち土曜）の次の日即ち日曜日に主は其使徒等及び其弟子等に顯はれて、吾人が亦陛下の參考に具ふる爲に傳奏したる彼の事柄を彼

等に教へたまひたればなり

（アポロジ一編第六十七章）

此辨解は紀元後百四十年頃に記されたるものにして博學達識なるジヤヌチンの知り得し限りに於て當時基督教徒の普通に實行せる所を表せるものなりと假定せざるべからざるものあり。

第十五章 基督の王國の進歩成績に關する

使徒等の教訓

使徒等の教訓によれば基督の政治の進歩は内部の生長と外部の擴散とを兼ねたり、信者個人の精氣的生命に於ての生長あり換言すれば其信、望、愛は漸々深く深く且其勢力を増加するあり、又時代の進むに従ひて信者の數は増加して遂に萬國民は皆基督に服従するに至るべし。ペテロは信者の個人的生長を以て基督教徒たる者の義務或は特權なりと認めて「我儕の主なる救主耶穌基督の恵と彼を知るととに益進め」

内長即ち
心中の生

(彼後三〇一八)といへり、此引照に於ては基督の恵と彼を知るとは生長の要件即ち基督信者の生涯を圍繞する所の大氣なりと思惟せられたり、而して此句は基督教徒の生涯中成熟の方に進歩する二個の主要なる方法を示せり、即ち基督より與へられたる聖氣の感化力、及び魂に基督を顯す所の神聖なる真理の感化力是なり、第三の要件即ち基督信徒の動作に關するとは恐くば命令的なる「進め」なる語より想起せられたるならん、此句と共に希伯來書の「爾曹時を経ること久しければ教師となるべき者なるに今復神の教の初の事を教へられざるを得ずして固りたる食物ならで乳を用ゐるべきものとなりたればなり、……固りたる食物は知識を働かせ鍊りて善惡を辨へ得る大人の用ゐるべきものなり」(五〇一二、一四)を聯想するを得べし

基督教上の知識

基督教徒の生長する事實は基督教上の知識の増加することなることを思惟せしむ(希六〇一以下西一〇九、十弗一〇一六、一七、三〇一六、一八)

哥前二〇六)抑も神の眞理は精氣的食物にして此食物を其魂に受くることなくんば神聖なる生命に於ける生長あることを得じ。

信仰

基督教徒の生長は信仰の増加を含有せり、希伯來書は「疑ひなき信仰」(二〇二二)を稱しパウロは「アブラハムは、確に信じたり」と證明し(羅四〇二一)「テサロニケの教會員は、信仰大に増し」と證明せり(後一〇三)而して「ヨハネは一層十分なる知識によりて神の子の名を信する所の者は限りなき生命を有つことを知り得ん爲なり」(約壹五〇一三)と教へたり、是れ即ち確實なる信仰なり

愛

基督教徒の生長は愛の増加を含有せり、ヨハネは「我儕若互に相愛せば神我儕の中に居したまふ又彼の愛我儕の中に全うせらる」(約壹四〇一二)と記し、パウロは「コロサイの信者に對して種々の善徳を枚擧せるのち」此諸の事の外に愛を結べ愛は凡の徳の帶なり(三〇一四)と勸告し、且「ピリピの信者に對しては、爾曹の愛が智識と諸の辨別とに於て益増さ

信者の境遇は皆長生を助くる

んことを祈る(一〇十)と公言し、ペテロも亦最も重なる所は互に厚く相愛すべき事あり蓋愛は多くの罪を蔽へばあり(前四〇八)と記せり
此等の外に希望、勇氣、自制、忍耐、禮儀、勤勉、自給、慈善及び基督教的品性の夥多の條理に關して新約聖書中の書簡にある凡の教訓を示すと此所に其必用あらず、亦神の人が諸徳を練磨して基督の滿ちたる量程に全き者とあるまで(弗四〇一二)の方法に關して使徒等の教訓を陳列するの要なきなり、されど家族と教會とに於ける凡の生涯の整理即ち此世に於ける凡百の勞働、艱難、凡百の不安失望、凡百の競争失敗、凡百の勝利成效は皆凡の事は神を愛する者即ち其企圖に従ひて召されたる者の爲に與に働きて益をなす(羅八〇二八)といひし如く基督教徒の精氣的訓練の爲に宜しく整へらるゝとを説話するは適當なるべきなり、私かなる祈禱、共同禮拜、教會の秩序責任、迷へるものを基督に導く勸勞、六日の勞働、主の日の休息は皆共同的作用によりて結合して一の如くな

罪なきを意味せず

りて徳の生長を助くるあり。

然りと雖も新約聖書の何れの記者も自ら罪なく完全の状態に達したりとし或は此世に於て人が斯る状態に達せんことを期せし十分なる證據あることあり(雅三〇二約壹一〇八腓三〇一二一四)ヨハネのいはる[我儕凡て神より生れたる者の罪を犯さざる事を知る神より生れたる者は自己を守る又惡き者彼に觸れず(約壹五〇一八)は新生以後の凡の基督教徒に應用すれども是只生命の新しき原素は其創造者の如く神聖なるものなるを意味するのみ。

保護せらるべきこと

されど假令新なる生命は此世に於て不完全なるも仁愛なる神は其亡ぶることを許したまはずとの意見を是とするに付ては語り得べきこと多し。忠告、獎勵、試練、聖氣の存在及び道德上の自由に適へる凡百の感化力によりて基督は「末の世に顯はれんとする備はりたる救の爲に信仰によりて(彼前一〇五)其民を守りたまふ

吾人は既に甦りたまひし基督は其弟子等に萬國民に福音を宣傳すべきことを命じたまひしことを見たり、此命令は實に之を聞きしもの、みならず彼等の宣傳に由て之を信すべき凡の人々及び基督教時代の終末まで其信者等にも與へられしことはマタイの記載したる言語より常に之を推察し得べし。パウロの書中の或る章を讀んで彼が歡喜を以て基督の王國の洪大なる擴張を望みしことを感せざらんと欲するも能はざる所あり即ち

亦一人の願ひし事に由て多くの人義とせらるべければなり(羅五〇一九)幾許のイスラエルの鈍きは異邦人の數の滿つるに至らん時までもあり(羅一一〇二五)神は萬民を矜まんぞ欲して萬民を背叛の中に置き給へり(空〇三二)凡の膝は我に屈り凡の舌は神を讃むべし(羅一四〇一一)神凡の者を基督の足の下に服さしめ給ひたればなり、凡の者は服さしめらる(哥前一五〇二六、二七)是天にゐる者地にゐる者及

び地の下にあるもの、凡の膝は耶穌の名に於て屈み、且凡の舌は父なる神に譽を歸せんとて耶穌基督は主なりといひあちはさん爲なり(腓二〇十、十一)其十字架の血に由て和睦をなし彼に由て萬物即ち地の上にあるもの天にゐる者をして己と和がしむることを善しとしたり(西一〇二十)

此等の引照の文字通りの意義はパウロ若くは其同輩の他の陳述によりて如何に制限せらるゝことを得るとするも明に基督の王國の洪大なる擴張を教示せるなり、此等の引照中の數句によりて文字通りに表れたる宇宙的主義に幾何の制限を置かれざるべからざることば左の陳述により明なりとす。

神を知らざる者等と我儕の主耶穌の福音に服はざる者とに刑罰を施したまふときに、爾曹を苦むる者には艱苦を以て報い又爾曹苦めらるゝ者には我儕と共に安息を以て報いたまふは神に於て義しき

事なればなり、主耶穌其聖徒等によりて崇められ又爾曹が我儕の證に依りて信せし所の福音を信する凡の者に由て譽められん爲に來りたまふ日に於て、其服はざる者等は主の前と其力の榮光とより離れて義しき刑罰即ち限りなきの滅亡を受くべし(帖後一〇七—十)律法なくして罪を犯し、人々は又律法なしに滅びん律法ありて罪を犯し、人々は律法によりて判かれん(羅二〇一二)義からざる者は神の御國を嗣ぎ得ざることを知らざるか爾曹欺かる、勿れ密通する者偶像を拜む者姦淫する者淫亂を好む者男色を行ふ者、盜む者貪る者酒に酔ふ者罵る者奪ふ者等は皆神の御國を嗣ぐとを得ず(哥前六〇九、十)神の怒は是等の事に因て悻れる者に臨めばなり(弗五〇六)何人にてても主を愛せずんば其者は咀はるべし(哥前一六〇二二)夫れ肉の行爲は明白なり……我嘗て云ひし如く……斯の如き事を行ふ者は神の御國を嗣ぐとを得ず(加五〇一九—二一)をば審判は神の家よ

も始るべき時は既に至ればなりされども是我儕より始らば神の福音に従はざる者の終は如何ならんか、若義しき者辛うじて救はるゝ事を得ば敬虔なき者と罪人とは何處に顯はれんか(彼前四〇一七、一八)外には犬等、魔法師、密通を行ふ者兇殺をなす者偶像を拜む者及び凡て偽を好みて之を行ふ者どもあり(黙二二〇一五)參照羅九〇二二、哥前九〇二七、哥後四〇三、四弗四〇一八、一九帖前五〇三、提前四〇一—三希一二〇二五—二七、彼後二〇九、一七、三〇七、默二十〇十、一五)此等の種々の陳述の中に吾人は若干の人々は始終罪に附着し斯て永久神の怒の下に止まるべしといふ信仰の明白なる表示に劣らざる言語あるを發見すべし、然るに該記者等は神の怒は全く正しきものありと教へたり、換言すれば其怒は決して法外に嚴酷なるものにあらずして、凡の理性あるもの、及び其敵對する者にすら最高の幸福を與へんとて最上の注意を施したまふこと、相矛盾する何等の行爲にも決して

パウロの語の意味

あらはれざることを教ふるなり
 若吾人は今二三の箇處に於けるパウロの宇宙的主義に關する言語を回顧せば左の二つの方法の孰れか一を以て之を解釋せざるべからず即ち其一は過大なる言語を用ひしこと換言すれば俗語を用ひて精密なる事實に過ぎたる說話をなし、こと例へば馬太傳に記されたる「頃エルサレム及びユダヤ中。またヨルダンの四方の人々出で、ヨハチに至り己が罪を懺悔しヨルダン川にて彼より沈を受けたり」(三〇五、六)は亦此類なり他の一は基督に對する心服即ち精氣的服従一致をなすに至らんといふ深遠なる意味にあらざることをして之を解釋せざるべからず、後の意見によれば羅一四〇一一、一二哥前一五〇二四、二五腓二〇九一一弗一〇十西一〇二十は基督の指示したまへる真正ある秩序調和の完成を前言せるなり、されど終末の日に至らば基督若くは神の絶對的統治を妨ぐる力を邪氣及び惡人より奪ひ去りたまひ以て

所謂る秩序調和は成就完成せらるべく、且他の句即ち羅五〇一八は條件によれる萬民の爲義即ち基督に於ける信仰に由て神の前に嘉納せられんために十分なる準備あることを示すものなるかも知るべからず、されど此使徒の言語を了解するにはメシヤの統治の膨脹と其感化力とは洪大なるものなることを知らざるべからず、而して此統治の成績は義と和となるべし。默示録には著しき言語に於て「誰も數へ得ざる程の大なる群集を見たり彼等は凡の國民と凡の種族と國人と國語との中より來り白き衣をき手に棕櫚の枝を持ち云云」(默七〇九)と記されたり、されど諸の書簡は基督の統治の結果若くは其成績を語るときに肉體の死又は肉體の死後意識ある存在、死人の復活、及び終の審判を指示せり。

肉體の死

肉體の死に付て諸書簡の述ぶる所は基督の聖言に叶へり、されど如何にしても主が教へたまひし眞理を發達せしめたりといふこと能はず、

死は體と氣との間の結合を分ち體をして亡びしむるものと假定せられたり。何となれば身體は彼の生命なき自然の勢力に委ねらるゝときは朽つべきものなればなり(哥前一五〇四二―五四)

肉體の死
後の生命

諸書簡の語は又肉體の死後人々の意識ある存在に關して基督の聖言に叶ふ(哥後五〇六―八腓一〇二―二四希一二〇二二三彼前三〇一九彼後二〇九)此等の引照は路一六〇二二以下と太一七〇三とに比較することを得べし

復活

諸書簡の語は又死人の復活に關する基督の聖言に叶ふ(徒二四〇一五帖前四〇一三以下參照約五〇二八、二九)死人の復活の事實に關して殆んど凡の解釋者は使徒等の教訓は明瞭にして疑ひなきものなりと信せり、されど此復活の事情に關して解釋者の説明する所は種々同異あり。例へば復活の時期に關しては或者は凡の死人は終の日に甦らさるべしと教ふるものと諸書簡を解釋し(約五〇二八、二九)他の人々は義人

は惡人より千年先だちて甦らさるべしと教ふるものと解釋し(黙二四〇四―六)猶他の者は凡の人は自然の死の其時直に甦らさるゝものと解釋す(太二二〇三十一―三二)凡そ此問題に關する諸句を研究するに當りて特別の注意を要することあり、第一、預言の言語は自ら歴史の言語より曖昧なるによること、第二、吾人は全く經驗なき存在の状態を恐るゝ傾向あるによること、第三、吾人は猶豫なく最も高尚なる存在の状態に達せんと熱望するによること是なり。徐々^〇に富と力と譽とを得んと欲するもの千人に一人もなかるべく、知る能はざる進歩の階段を通過して最良なる生活の状態に於ける最上なる幸福の置位に登るより寧ろ直に憂愁多き地上より最高の幸福ある天國に飛騰することを好まざるものは恐くば千人に一人も之れなかるべし。

中間の狀

第一の意見は此問題を解釋するに大なる困難あるにも係らず復活の時期に關して最も平易なる聖書上の根據によりて支持せらるゝもの

、如し復活は基督がユダヤ人及びマルタに談話したまひしとき(約五〇二八、六〇三九、四十、一一〇二四—二七)は猶未來の事柄なりしが如くパウロがテサロニケ人及びコリント人に其書を贈りし時に於ても未來の事柄ありき(帖前四〇一三一—一七哥前一五〇二三—五二)何となれば耶穌が終の日とのたまへる語はマルタが斯いへる同一の言語の意味とは全く異なることを意味したまひしといふ推察には堅牢なる論據あらざればあり。此故に吾人は人類の大部即ち基督の再臨したまふ時に當りて肉體を有して活けるもの、全體及び其外一二の人を除きて身體の死と終の日に於ける復活との間には或は長日月あり或は短時間あるとを信せしめらるゝなり。其時日の間に於て基督教徒の狀態如何に付ては諸書簡の記述する所只僅々なるのみ、然るに此間信者等は主と共にありといふ大切なる事實を示せり(哥後五〇六一—八腓一〇二一—二三)而して此事實は此世に於て達し得らるべき如何なる個人的

終極の裁

幸福よりも遙によしと呼ばるべき精氣的平和と進歩とあるべしといふ確信を伴ふなり

復活の後に次々べき者は審判なり(約五〇二九、黙二十〇一一—一五太二五〇三一—四六徒一七〇三一)此審判は正義を以て行はるべし、此審判は身體を以ておしたる行爲の如何によるべし(哥後五〇十)此審判は必ず各人の有したる神の意志に關する知識の程度に應ずべし(羅二〇一二)此審判は基督之を行ひたまふべし(提後四〇一)此審判は基督の凡の臣僕の是認する所なるべし(哥前六〇二)此審判は變ずべからざるものあるべし(黙二十〇一一—一五)されど審判の變せざる理由は救へられざるが故に吾人は善人と悪人とは既に各其終極の撰擇をなし且其道義上の進路を定めたりと假定することを得るなり、換言すれば善人は永久神に奉事し其愛を被り、悪人は其恵を拒み且己自らの企圖を以て満足せんことを撰び取りしなり

死と復活との間に於ける人々の状態に關して新約聖書は説明する所少し、但し悪人は罰を受けて幽冥にをり(路一六〇二八—三一彼前三〇一九—二一、四〇六彼後二〇九)義人はアブラハムの懷即ち樂園或は基督と共にをるものなりと示されたり(路一六〇二二以下二三〇四三腓一〇二三)されど此世に於て歴史上基督に關する知識を有せざる者の爲に煉獄なるものありといふ理論は新約聖書一般の教訓に調和せざるものゝ如し、右の理論はペテロ前書にある曖昧なる二句に基く者なり—此等の説明は本著者の聖書的極論中九十七頁より百十三頁までに見えたり—斯る二句は甚だ相異なる意味に解釋するを得る者なり、終の審判に於ける記録中に死後に行ひし行爲を認むることならず、又此世を去るの後悔改と信仰との故を以て人々に赦免を與ふるといへる承認あることなし、此故に墳墓の下に主を求むる便利の時機を尋ねるは極めて危険なることなりとす。

第三編 信條の制定と其用法

願くは主耶穌基督の恩惠神の愛聖氣の交通爾曹凡の者と共にあらんことを(哥後一三〇—一四)

第十六章 信條に關する疑問

前編に於て陳述したる基督及び其使徒等の教訓の説明は單に本書記者が搜索し得たる見聞に照らして新約聖書の或る部分に施したる其解釋なることを了解せられんことを要す、然して使徒中の最終の人が既に其事業を完了せし後基督教國に於ける一般の解釋と此解釋と相異なる所は幾許なりやとの疑問は自ら讀者の心中に生ずるならん、即ち吾人の信仰の根據にして彼の空前絶後なる記録中に今日發見する所の教訓の古より此記録中に發見せられたるものと同一なりや、此疑問に對する答棄は假令常に満足なるものと思惟さるゝ能はずといへ

とも基督教國の信條中に備はれり而して讀者は彼の暗黒時代に於て此等の信條を制定せし種々の會議若くは集會の歴史を一見するときは其不満足なる理由は自ら明瞭なるべし。

抑も信條とはラテン語のクレデレ即ち信ずといふ義より來れる語なり公共の使用に供する爲に備へたる信仰の告白なり故に信條は之を制定せる人々に由て定められたる教理上の條款の簡短なる撮要なるか若くは稍十分ある其陳述あるかなるべし多くの人は信條なる語の代りに信仰箇條或は宗教條款なる同意義の語を用ゐることを好めり例へば宗教三十九箇條は英國々教會の是認せる信條の名稱なるが如し。

抑も信條の制定の依て起りし所以は

第一、基督信者等が此世及び未來に於て人間の幸福に要用なりと思惟せし宗教上の事實と其主義とを明に制定せんことを熱望せしによる

信條の制定せらるる所以

換言すれば斯る事實及び主義は井然たる方法と成るべく明なる術語とを以て表示せられんことを望みしによれり蓋し人の理性の之を求め又移めて之を得るにあらずんば満足せざりしならん

第二、何人も偽りの教訓に誘はれ或は基督教を誤認して他物として之を信受することすらもなからしめん爲に眞理は白日の下に顯はされ屋上より揚言せらるべきものなりと多くの基督教徒が信せしによれり蓋し神秘其物は自ら悪しきものに非ずといへども宗教の要用なる眞理を信受せしめんことを求めて人々に對して之を説明せんとせば成るべく明哲なる思想を得んことを要するなり而して能く教理を咀嚼して撰定せる信條は斯る種類の思想を表示するに最良なる媒介たること屢なりとす。

第三、基督教の主長者等が歲月の進むに従ひて誤謬若くは新説が確に顯れ出で、諸教會を分離衰弱せしめんとする時之に反對して一致抗

論せしめんとを豫じめ望みしによれり。蓋し信條の制定を奨励せる原因にして之に勝るものあらざりき、所謂論争時代は特に信條の産出を催がせり。何となれば正直なる人々は斯る時代に於て信仰上自己の位置を了解せられんことを望み、且此希望を達する最も單簡にして最も效力ある方法は右の如き精密に陳述したる信條を準備するにありと思惟したればあり、此人々は又其懐抱する所の主義をして其反對する所の誤謬に對抗せしめんことを望み、右の方法を以て其誤謬の擴散を限制し得べしと信せり。

第四、多くの人々が其信に尊む所の事實と其主義との是認したる撮要は青年の弟子に生命の道を教ふるに必用なるべしと確信せしによれり。

凡て右に述ぶる所の關係に於て基督教國の信條は眞理を助け人氣自然の欲望を充たしめたり、信條を制定せしめし動機は實に稱讚すべき

信條に對する異議

ものあり、されど亦其感化力は永久にして且盡く安然なるものにあらざることば之を承認せざるべからず其理由は乃ち左の如し。

第一、信條は基督教眞理の不完全ある撮要にして凡の場合にあらざるも若干の場合に於て幾分か誤謬ある撮要なることは免れがたきものかれど年月の経過せる後には恰も之を以て完全にして缺點なきが如くに待遇せらるべき傾向あり、何となれば人々の團體は本心より其信仰の告白を採用し之を世に公けにせしとき此團體の凡の人々は其告白を辯護し終には其實に過ぎて之を以て神聖なるものと思惟するに至るは自然の趨勢なればなり。

第二、信條は或人をして信仰の終極の法則なる聖書より離れしめて之より劣りたる信條其物に來らしむる多少の勢力を有したるもの、如し、是決して信條制定者等の希望せし所に非ず、彼等は單に聖書の意味或は聖書並に是認せられたる傳説の意味なりと思惟したる者を明瞭

にして簡短ある形式に顯はさんと欲したり、然と聖書は同一ある真理について多くの表示説明を有する宗教的書籍館あれば人々の使用に供せんが爲に聖書全體よりも一層便利なるもの即ち其教訓の概畧を作ることは成し得べきことなりと思惟して其結果は時としては信條と禮典書とは遂に聖書の置位を犯すに至りしことあり。

第三信條は時として眞理の新方面の理に叶へる搜索を妨げたり、人々は聖書と宇宙とは神及び其意志に關して未だ嘗て學ばざる多くの學課を有せりといふ推察を以て之を研究することを憚かれり、蓋し彼等は一層進んで學ぶべきとありとせば其物の彼等の尊敬する信條中に述べられたる何物をも少しも變更せざるものあるべしと推定するは理に叶へりと思惟せり、されど是信條を尊崇すると其當に過ぎたるなり、換言すれば信條を以て其依て生じたる倉庫内の寶物に豫じめ其用途の制限を定めしむるに足れるものと思惟せるなり、亦是實に信條の

制定者等を以て完全に基督教眞理の神聖なる根原なる聖書を解釋せしものと假定せるなり、然れども彼等は之を能くせざりしやも知るべからざるなり。

第四、或る信條中の或る部分は偽りの光明を以て基督教を示すが故に基督教其物に反論を惹起したり、廣く世間には認せられたる信條の中に此例證を示すことは難事にあらざるなり、新教徒は舊教の定律法令中の若干部は基督の精氣を誣ひ其來りて設立したまひし宗教を害するものなりと思惟せり。

然れども大抵正當なる信條の善良なる勢力は恐らく其惡しき勢力より勝るものにして其惡しき勢力は信條を正用するよりも擧る之を誤用するより生ずるものなり、若教會或は諸教會の團體の宗教上の信仰を表示する信條を以て其教會若くは其宗派の會員の了解したるが如く聖書の宗教的教訓を制定せる只人間の事業なるのみと認めれば信

正當なる
信條なる
用はるべし